

# 桜峯(1)・雲谷山吹(3)遺跡

## 発掘調査報告書

平成11年度

青 森 市 教 育 委 員 会

## 序

青森市教育委員会では、今年度、市内雲谷に所在いたします桜峯(1)遺跡ならびに雲谷山吹(3)遺跡について、県営八甲田地区農免農道整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施いたしました。

桜峯(1)遺跡は、平成7年度から同8年度まで国道103号横内バイパス道路改良工事事業に先立つ埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施しており、縄文時代前期末から中期初頭を主体とする集落跡の一部を確認しております。

本年度の調査は、前回の調査区から西側に伸びる地区を中心に調査したものであり、調査の結果、土坑やピット等を検出し集落跡周辺の遺構の広がりについて新たな知見を得ることができました。

また、雲谷山吹(3)遺跡は、残念ながら遺構の検出は見られませんでした。遺跡内から縄文土器が出土しており、周辺部にいにしえ人のなりわいの可能性を知ることとなりました。

本書が埋蔵文化財の保護・活用ならびに地域の歴史学習等に役立つことができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、関係機関並びに各位からのご指導、地元各町会からのご協力、さらに工事主体者である東青農村整備事務所のご理解に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

青森市教育委員会

教育長 池田 敬

## 例 言

1. 本書は、青森県青森市大字雲谷字山吹に所在する桜峯(1)遺跡(青森県遺跡番号01-207)ならびに雲谷山吹(3)遺跡(青森県遺跡番号01-285)の発掘調査報告書である。
2. 本書に記載される内容は、青森市が東青農村整備事務所の委託を受け、平成11年度に青森市教育委員会が発掘調査を実施した地区についてまとめたものである。
3. 調査は、県営八甲田地区農免農道整備事業に伴う発掘調査として平成11年度に実施された。両遺跡の総調査面積は4,761m<sup>2</sup>である。
4. 桜峯(1)遺跡は、平成6年度から平成8年度まで国道103号道路改良工事事業に伴う発掘調査を青森市教育委員会が実施しており、調査成果については、平成9年度に報告書を刊行している(青森市教育委員会1998)。本書で記述される桜峯(1)遺跡に関する調査区は、刊行済み報告書の調査区B区と接する部分から西側の斜面にかけての地区にあたる。
5. 雲谷山吹(3)遺跡は、平成8年度に当委員会が雲谷山吹(4)遺跡として台帳登録をした遺跡であるが、登録時点で番号を誤って登録しており雲谷山吹(3)遺跡が正式名称である。この経過については、県文化課に報告済みである。
6. 基準点測量・グリッド杭打設はみちのく計画に委託した。
7. 本書の執筆は、青森市教育委員会が行い木村淳一・堀内万里子が担当した。執筆分担については、第章の土坑の記述については堀内が行い、それ以外の記述については木村が担当した。編集については、木村が担当した。
8. 調査に関わる資料は、一括して青森市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査の実施にあたっては、地元町会の多くの方々からご協力をいただき、また次の諸機関からは、発掘調査の実施並びに発掘調査報告書作成にあたってさまざまなご指導・ご教示・ご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。(順不同)

青森県教育庁文化課・青森県埋蔵文化財調査センター・青森県立郷土館、南部二区連合町会

## 凡 例

1. 図版番号及び表番号は、原則的に「第 図」「第 表」とした。
2. 本書の各図及び写真図版の指示は以下の通りである。
  - (1) 方位は全て真北である。磁北については西に約8度振れている。
  - (2) 各図の縮尺は以下の通りである。  
遺構 1/1500 1/240 1/120 1/60 1/30
  - (3) 水平基準は海拔高をメートル(m)で表示した。
  - (4) 遺構の略号は、SK = 土坑、SD = 溝跡、SP = ピット、SX = 性格不明遺構・その他の遺構である。なお、SXの呼称については遺構確認時点で性格が不明と思われるものについて適用した。
3. 遺構番号については、遺構の種別毎に番号を付した。具体的には遺構の略号 - 番号とした。(例: 第1号土坑 = SK - 01)
4. 本書で使われるグリッドについては、南北方向にアルファベット、東西方向に算用数字を付しそれを組み合わせたものとした(例: AE - 10)。呼称については、格子の南東隅の杭番号を使用した。
5. 本書の土層の注記については、『新版標準土色帖』(小川正忠・竹原秀雄 1993)に準拠した。
6. 土層の観察事項については、土の湿乾、土のしまり、混入物のサイズ+量について観察した。各観察事項について以下の段階に区分し、数値と語句で表現した。
 

土の湿乾	1	2	3			
	(湿) (中) (乾)					
土のしまり	1	2		3		
	(しまりなし)		(中)	(しまりあり)		
混入物粒径	極少	小	中	大	極大	
	( 1 ~ 5mm )		( 5 ~ 10mm )	( 10 ~ 30mm )	( 30 ~ 50mm )	( 50mm 以上 )
混入物量	1	2	3	4	5	
	( 極微量 )	( 微量 )	( 少量 )	( 中量 )	( 多量 )	
7. 遺構の規模については、基本的に長軸×短軸×深さをcm単位で表示した。このうち深さについては、遺構確認面からの計測値を記した。
8. 本書の図中で使用されるスクリーントーンの指示については以下のとおりである。



地山



焼土



凹み



磨り



敷き

# 目 次

序	
例言	
凡例	
目次	

## 第 章 調査経緯

第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査要項.....	1
第3節 調査方法.....	2
第4節 調査経過.....	4

## 第 章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境.....	6
第2節 歴史的環境.....	6

## 第 章 桜峯(1)遺跡

### 第1節 検出遺構と出土遺物

1. 土坑 .....	9
2. ピット .....	9
3. 溝状遺構 .....	15
4. 焼土遺構 .....	19
5. その他の遺構 .....	19

### 第2節 遺構外出土遺物

1. 土器 .....	20
2. 石器 .....	25

## 第 章 雲谷山吹(3)遺跡

### 第1節 遺構外出土遺物

1. 土器 .....	26
2. 石器 .....	26

遺物観察表.....	29
------------	----

第 章 まとめ.....	30
--------------	----

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

## 第 章 調査経緯

### 第 1 節 調査に至る経過

東青農村整備事務所は、県営八甲田地区農免農道整備事業を計画し、青森市教育委員会（以下当委員会）に対して、道路建設予定地内について埋蔵文化財包蔵地所在の有無確認がなされた。

これを受けて当委員会で遺跡所在の有無確認をしたところ、当該予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地である桜峯（1）遺跡ならびに雲谷山吹（3）遺跡の所在していることが判明した。当委員会では、埋蔵文化財保護の立場から、埋蔵文化財包蔵地の現状保存のため、事業計画予定地の変更ならびに見直しの要望と、それが困難な場合は、記録保存のための発掘調査が必要である旨の回答をした。

その後、東青農村整備事務所と当委員会でその取扱いについて協議をおこなったが、事業計画の変更は、困難であるとの結論に至り、事前の発掘調査による記録保存が図られることとなった。

その協議の際、調査対象遺跡である桜峯（1）遺跡と雲谷山吹（3）遺跡は隣接している遺跡であるため両遺跡を一括して対象とした調査形態をとることとした。

東青農村整備事務所から平成 11 年 3 月 10 日付け東青農第 462 号で当委員会に発掘調査の依頼があり、これを受けて当委員会で協議を重ね、文化財保護と開発事業との円滑な調整を図るため依頼を受諾することとなり、平成 11 年 3 月 17 日付け青市教委社第 119 号において受諾の旨の回答をした。

発掘調査は平成 11 年 7 月 5 日から 10 月 1 日までの期間で総対象面積 7,521m<sup>2</sup> のうち 3,000m<sup>2</sup> を調査対象面積とし実施することとなった。

### 第 2 節 調査要項

#### 1. 調査目的

県営八甲田地区農免農道整備事業に先立ち、予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域社会の文化財の活用にあ資する。

#### 2. 遺跡名及び所在地

桜峯（1）遺跡（さくらみねかっこいせいせき）

青森市大字雲谷字山吹 92-33 ほか

雲谷山吹（3）遺跡（せやまぶきかっこさんいせいせき）

青森市大字雲谷字山吹 92-486 ほか

#### 3. 発掘調査期間

平成 11 年 7 月 5 日～ 10 月 1 日（調査期間短縮により平成 11 年 7 月 5 日～ 9 月 24 日）

#### 4. 調査対象面積

3,000m<sup>2</sup> [ 桜峯（1）遺跡 1,700m<sup>2</sup>、雲谷山吹（3）遺跡 1,300m<sup>2</sup> ]

（全対象面積 7,521m<sup>2</sup> 実調査面積 4,761m<sup>2</sup>）

#### 5. 調査委託者

東青農村整備事務所

#### 6. 調査受託者

青森市

## 7. 調査担当機関

青森市教育委員会生涯学習部社会教育課埋蔵文化財対策室

## 8. 調査指導機関

青森県教育庁文化課

## 9. 調査体制

調査指導員	村越 潔	青森大学考古学研究所所長兼教授	(考古学)
調査員	藤沼 邦彦	弘前大学人文学部教授	(考古学)
"	市川 金丸	青森県考古学会会長	(考古学)
"	工藤 一彌	青森県総合学校教育センター指導主事	(地質学)
調査協力員	櫻田 亮栄	南部二区連合町会長	
調査事務局	青森市教育委員会		
	教育長	池田 敬	
	生涯学習部長	中西 秀吉	
	生涯学習部次長	小山内 博	
	社会教育課長	間山 義弘	
	埋蔵文化財対策室長	遠藤 正夫	
	室長補佐	蝦名 淳一	
	主査	堀谷 久子	
	"	田澤 淳逸	
	主事	小野 貴之	
	"	木村 淳一 (調査担当)	
	"	児玉 大成	
	"	沼宮内陽一郎	
	"	設楽 政健	
	調査補助員	堀内 真理子	

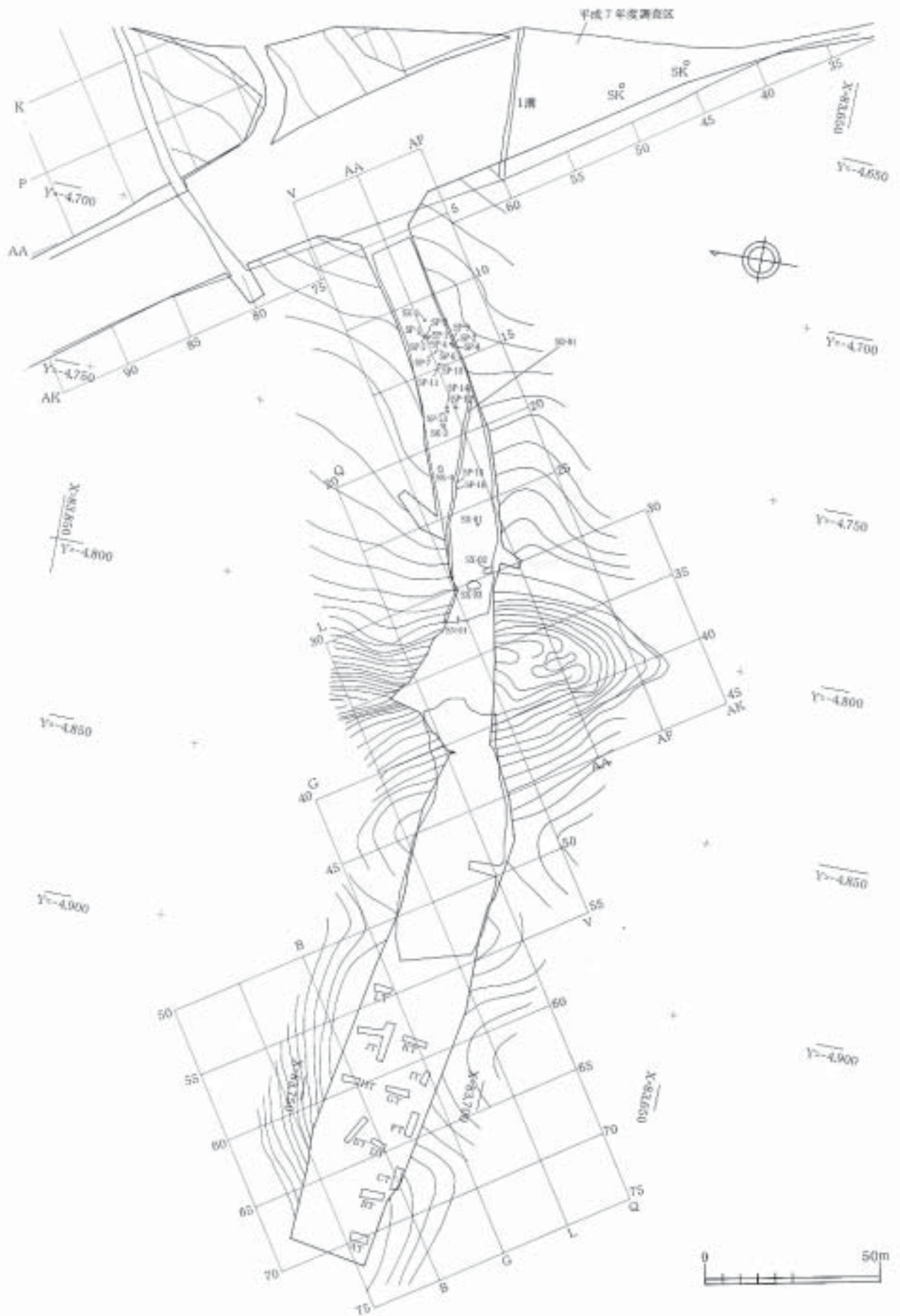
## 第3節 調査方法

今回調査を実施した桜峯(1)遺跡は、当委員会が平成6年度から8年度まで調査を実施した国道103号バイパス建設事業に係る桜峯(1)遺跡(青森市教育委員会 1998)の調査区(以下前調査)と隣接する地区を対象としている。

グリッド等の設定については、連続する地形であることから本来であれば前調査と同様のグリッド配置が望ましいのであるが、前調査区が国道103号バイパスとして既に供用を開始され、地形等が大きく改変されていた。そこで、今回調査にあたった調査区については、新たにグリッドを設定し調査に臨んだ。グリッドの設定の方法は、国道103号バイパスに接する直線部分のセンター杭(No.0～No.2)を基準とし、4m×4mの小グリッド単位に調査区全体を網羅できるように設定した。グリッド番号については、南北方向をアルファベットとし東西方向を算用数字で表しその組み合わせで表した。小グリッドの呼称は、南東隅の呼称を適用した。

雲谷山吹(3)遺跡についても調査区が桜峯(1)遺跡から延伸する部分にあたることから桜峯(1)





第1図 桜峯(1)・雲谷山吹(3)遺跡グリッドならびに遺構配置図 (S = 1/1,500)



遺跡で適用したグリッドをそのまま適用する形をとった。

また、水準点については、現地付近に残存していた工事用B.M. (h = 119.488m) を利用した。

グリッド杭打設・水準点測量については委託を実施し、調査区内にグリッド杭17点を打設し、それに水準点を移設する方法をとった。

調査の運営については、当初両遺跡合わせて3,000m<sup>2</sup>を対象とする調査であったため、桜峯(1)遺跡の国道103号バイパス側から西側に進む形をとった。前調査において本年度の調査区と隣接する部分は、きわめて遺物包含量が少ない散布地的様相を呈していたため、試掘先行全面調査という二段階にわけ実施した。全面精査の時点で遺物包含が密でない部分について重機による表土処理を行っている。なお、基本土層は、試掘時点での観察によるものであり、本調査においても適用した。(第2図参照)。

遺構精査については、土坑やピットについては二分法を採用し、溝跡については、適宜土層観察用のセクションベルトを設定した。

実測は、セクション・エレベーションについては、水系を設定し測量を行った。平面図作成については、トータルステーションを利用し、各遺構の測点を座標化し、出力した座標値を手作業で結ぶ手法を行った。本遺跡のように距離が長い中で遺構数が極端に少なくばらついている事例では、出力において手作業でも十分足りうるものであったため今回試験的に導入してみた。すべて現場内で帰結する手法であるため入力時のエラー等の確認についても容易であり、また測点を結ぶ際に遺構を観察しながら結ぶことができる点が有効であった。

写真撮影については、35mmのモノクローム、カラーリバーサルフィルムを併用し、作業の進捗に応じて行った。

#### 第4節 調査経過(発掘調査日誌抄)

7月 5日 調査開始。器材搬入、環境整備、発掘作業員講習。

7月 6日 調査区のうち桜峯(1)遺跡側から草刈り開始

7月 9日 草刈り終了。桜峯(1)遺跡側から坪掘りによる試掘調査一部開始。

7月12日 基準点・水準点測量開始

7月19日 基本土層作図

7月26日 桜峯(1)遺跡について表土処理開始。順次遺構確認の後、順次精査

8月 9日 雲谷山吹(3)遺跡の調査区について試掘調査

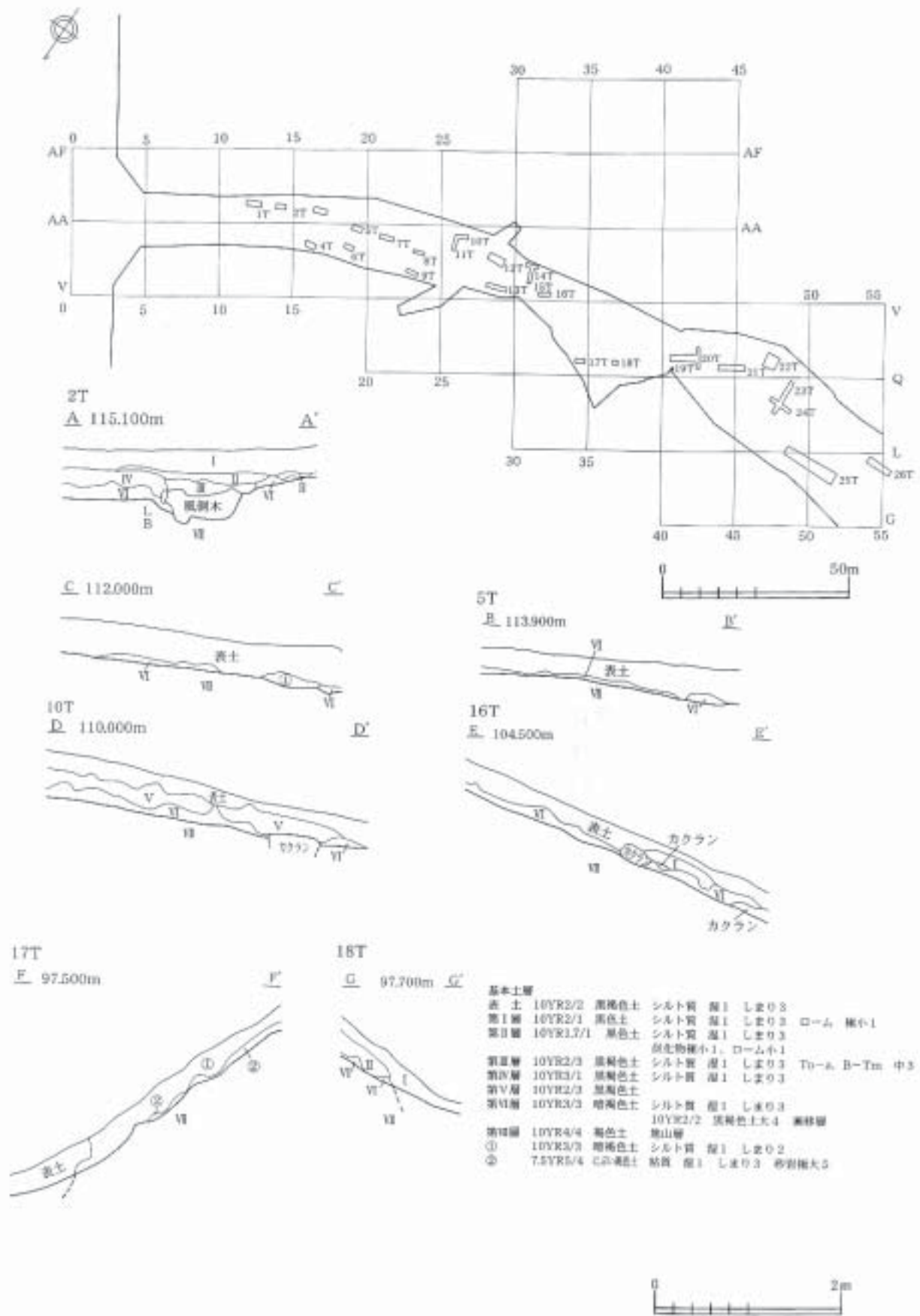
8月18日 雲谷山吹(3)遺跡について表土処理開始+遺構確認作業

遺構確認作業において少量の遺物の採取が認められたが遺構の確認が認められなかった。そのため、当初次年度予定の調査区についても調査必要範囲であるかどうか試掘調査によって確認をすることとなった。

9月14日 雲谷山吹(3)遺跡の残調査対象範囲について草刈りの後、試掘調査開始。(AT~LT)

試掘調査の結果、土層の改変が認められ、少量の遺物の出土は認められたが、遺構の確認がなされなかった。その結果、遺跡としては散布地としての様相はおさえられたが遺構の存在が認められないことが判明した。それによって当初発掘調査終了日が10月1日であったが9月24日までで短縮することとした。

9月24日 器材撤収。発掘調査終了。



第2図 試掘トレンチ配置図ならびに基本層序図

## 第 章 遺跡の環境

### 第 1 節 遺跡の位置と地理的環境

青森市は、北に陸奥湾を臨み、南を八甲田連峰に接した人口約 30 万人の県都である。市の面積は 692.27km<sup>2</sup> をはかり、市街地を中心に青森平野が東西約 10km、南北約 5 キロメートルの三角形を呈して広がっている。その平野部の西部は「入内断層」を境に比較的緩やかな丘陵が広がっており、北西部では特に数多くの小河川によって切り開かれている。「入内断層」より東側の南部地区では八甲田火砕流堆積物によって形成された台地が広がり、この台地も入内川、荒川、合子沢川、横内川等により切り開かれている。桜峯(1)・雲谷山吹(3)遺跡は、合子沢川と横内川に挟まれた比較的緩やかな丘陵上標高 100m ~ 120m 付近に位置する。

桜峯(1)遺跡の中心には市内と八甲田山を結ぶ国道 103 号が縦断しており、これまで八甲田山への観光ルート、あるいは雲谷スキー場へのアクセス道路として利用されてきた。その沿線にはその緩やかな地形上に住宅が若干建てられているだけで主に昭和 40 年代に植林された林地、荒蕪地、果樹園が存在している。果樹園については一部廃絶されており、遺跡外の地区では土取りの場所として大きく地形が改変されている地区もある。平成に入って雲谷地区に青森公立大学が設立され、国道 103 号についてもバイパスが作られ、周辺地域の再開発化が行われており、アパートのほか菜園、レジャー施設等が近年設立されている。

雲谷山吹(3)遺跡は、桜峯(1)遺跡の西側の一つ沢を隔てた丘陵上に所在する。沢そのものは急傾斜な地形で両遺跡の所在する丘陵と大きく隔てているが、遺跡より標高が高い地点では別荘地により沢が埋められ、旧地形が改変を受けている。雲谷山吹(3)遺跡が所在する丘陵は、桜峯(1)遺跡に比べやや傾斜を持ち、調査区より北側の部分については急激に北傾する。付近に道路等がない部分であるため、植林が行われている林地であった。

### 第 2 節 歴史的環境

八甲田火砕流堆積物によって形成された丘陵地全体では、近年 60箇所を越える遺跡の所在が確認されている。

資料的に見た場合、桜峯(1)・雲谷山吹(3)遺跡が所在する合子沢川と横内川に挟まれた丘陵上で人々の営みを示す最古の資料は、縄文時代早期白浜式期段階が出土した横内遺跡である。遺跡は、平野部に近い標高約 26m 付近に所在し、平成 5 年度に当委員会が市道改良事業に伴って横内(2)遺跡と併せて発掘調査を実施している。調査の結果、縄文時代前期中葉円筒下層 b 式期の竪穴式住居跡 1 軒、縄文時代前期末葉円筒下層 d<sub>2</sub> 式期の竪穴式住居跡 2 軒を検出している。隣接地の横内(2)遺跡からは縄文時代前期円筒下層 a・b・d<sub>1</sub>・d<sub>2</sub> 式の土器の包含がある土坑が 26 基検出している(青森市教育委員会 1995a)。

円筒下層 d<sub>2</sub> ~ 上層 a<sub>1</sub> 式期を主体とする集落跡は、平成 6 年度から平成 8 年度まで当委員会で調査を実施した桜峯(1)遺跡があげられる。調査の結果、標高 100 ~ 110m 付近の微丘陵頂部から円筒下層 d<sub>2</sub> ~ 円筒上層 a<sub>1</sub> 式期の竪穴式住居跡 7 軒、該期に属すると思われる土坑 50 基、埋設土器遺構 11 基、遺物集中ブロック 1 ポイントを検出し、小規模ながら標高 100m を越える地点で住居 + フラスコ状土坑

+ 遺物集中ブロックというセット関係を抑えられた(青森市教育委員会 1997)。縄文時代中期段階の資料は、遺物の出土例は認められるが、該期に伴う遺構の検出例が前期末から中期初頭に比べて少なくなる傾向にある。竪穴式住居跡についても桜峯(2)遺跡から円筒上層d式期の住居跡1軒の検出があるのみである(青森市教育委員会 1995b)。縄文時代後期以降この丘陵上では遺物の出土は認められるが具体的な遺構の検出例がほとんどなく様相についても不明な点も多い。縄文時代後期初頭から中葉の十腰内～式期、晩期大洞BC・A式期、また続縄文の資料についても桜峯(1)遺跡から後北C<sub>1</sub>式期の資料の出土例があり、断絶しながらも存続している可能性を持っている。

平安時代に入ると周辺の丘陵では集落の展開が始まるが、本丘陵で平安期の住居跡の資料は、横内(2)遺跡から検出した10世紀前半の竪穴式住居跡1軒のみである。

史料で本丘陵が属する横内地区周辺の記述が見られるのは中世後半以降である。15世紀末に平野部に近い丘陵先端部に横内城が築かれ、16世紀後半に城主堤弾正の統治下において周辺地域の開発の中心域となりえていた。堤弾正が討たれた以後、横内城番十人衆が置かれ、外ヶ浜を含めた地区を統治させている。本丘陵を含めた周辺は横内村として治められた。新田開発の対象地区ではあったが、石高は平野部への開墾が進まず、あまり伸びることはなかった。また、本丘陵上部にある雲谷地区には藩政期に津軽藩の牧場が設置され、牧夫として二十数人が居住している。地区の産物として炭・漆等が挙げられている(鈴木 1955)。明治に入ると横内村は、廃藩置県に伴い周辺の村を統合して東郡に属しており、昭和30年の市町村合併で現在の青森市に属するまで存在していた。

横内地区に所在する丘陵上に立地する遺跡は、全般的に村誌等で記述のある遺跡に対して、現在のところ周知の遺跡範囲として認定されている遺跡が少なく様相が不明瞭なこと多い。今後文献等と比較検討しながら周辺地区の遺跡立地について詳細な検討が必要とされている。

番号	台帳番号	遺跡名	種別	所在地	時期	備考
1	207	桜峯(1)遺跡	集落跡	横内字桜峯、雲谷字山吹	縄文(前・中・後・晩)、続縄文、平安	青森市教育委員会1998
2	285	雲谷山吹(3)遺跡	散布地	雲谷字山吹、合子沢字山崎	縄文(前・中)	青森市教育委員会1997
3	164	横内遺跡	集落跡	合子沢字山崎	縄文(早・前)	青森市教育委員会1995 a
4	206	横内(2)遺跡	集落跡	合子沢字山崎	縄文(前・中)、平安	青森市教育委員会1995 b
5	208	桜峯(2)遺跡	集落跡	横内字桜峯、亀井	縄文(前・中・後)	青森市教育委員会1995 a
6	174	横内城跡	館跡	横内字亀井	中世	青森市教育委員会1987
7	209	鏡山遺跡	散布地	横内字鏡山	縄文(前・中・後)	
8	284	横内猿沢(1)遺跡	散布地	横内字猿沢	平安	
9	215	四ツ石(3)遺跡	散布地	四ツ石字里見	縄文	
10	173	野尻館遺跡	館跡	野尻字野田	中世	
11	283	野尻野田(1)遺跡	散布地	野尻字野田	平安	
12	236	大矢沢里見(1)遺跡	散布地	大矢沢字里見	縄文	
13	28	四ツ石遺跡	散布地	四ツ石字里見	縄文(中・後)	青森市教育委員会1965
14	194	四ツ石(2)遺跡	散布地	四ツ石字里見	縄文(中・後)	
15	50	阿部野遺跡	集落跡	幸畑字阿部野	縄文(早・中・後)、平安	
16	262	合子沢松森(2)遺跡	散布地	合子沢字松森	縄文	
17	261	合子沢松森(1)遺跡	散布地	合子沢字松森	平安	
18	161	新町野遺跡	集落跡	野木字山口	縄文(前・中)、平安	青森県教育委員会1998
19	210	野木遺跡	集落跡	野木字山口、合子沢字松森	縄文(前・中・後・晩)、続縄文、平安	青森県教育委員会1998・1999

第1表 桜峯(1)・雲谷山吹(3)遺跡ならびに周辺の遺跡概要





第3図 桜峯(1)・雲谷山吹(3)遺跡位置図ならびに周辺の遺跡位置図 (S = 1/25,000)

## 第 章 桜峯(1) 遺跡

本遺跡では、1,700m<sup>2</sup>を発掘調査した。調査の結果、土坑3基、ピット19基、溝状遺構1条、焼土遺構1基、その他の遺構3基を検出した。また、遺物は、縄文土器・石器等ダンボール3箱分が出土した。

### 第1節 検出遺構と出土遺物

#### 1. 土坑

SK - 01 (第4図)

[位置] グリッドAB-11に位置する。[重複]なし。[平面形・規模] 不整形を呈し、77 × 64 × 21cmを測る。[断面形・壁面] 不整形を呈する。外側に緩やかに立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。底面は南側が北側より8cm低く起伏がある。[堆積土] 5層に分層した。[出土遺物] なし。

SK - 02 (第4図)

[位置] グリッドAC-13に位置する。[重複]なし。[平面形・規模] 一部調査区外へ延びるが、楕円形を呈すると考えられ、76 × 69 × 25cmを測る。[断面形・壁面] 鍋底状を呈する。緩やかに外傾しながら立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。底面は平坦である。[堆積土] 3層に分層した。[出土遺物] なし。

SK - 03 (第4図)

[位置] グリッドZ-18・19に位置する。[重複]なし。[平面形・規模] 楕円形を呈し、144 × 95 × 30cmを測る。[断面形・壁面] 鍋底状を呈し、外側に緩やかに立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。底面は、やや起伏がある。[堆積土] 2層に分層した。[出土遺物] 第1層から縄文土器1点(第4図)が出土した。

SK - 04 (第4図)

[位置] グリッドY-21に位置する。[重複]なし。[平面形・規模] 不整形を呈し、161 × 128 × 30cmを測る。[断面形・壁面] 不整形を呈する。[底面] 第層を底面とする。底面は平坦である。[堆積土] 6層に分層した。2度の掘り込みが行われているものと推定される。[出土遺物] 第2・5・6層から縄文土器が出土した(第5図)。遺物の接合関係から廃棄に伴う帰属関係は古い方の掘り込みに伴うものである。

#### 2. ピット

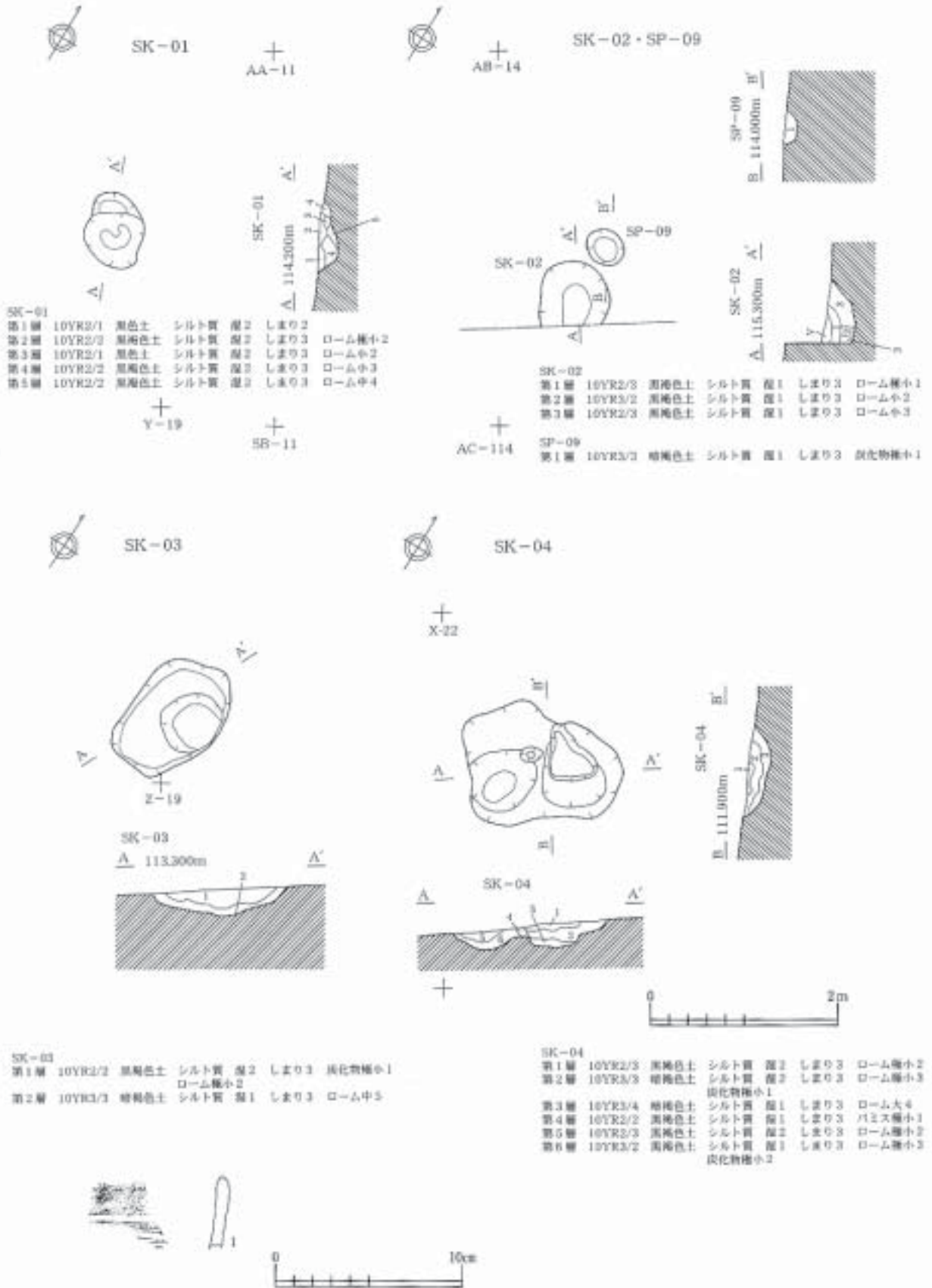
SP - 01 (第6図)

[位置] グリッドAB-12に位置する。[重複]なし。[平面形・規模] 円形を呈し、20 × 18 × 8cmを測る。[断面形・壁面] 鍋底状を呈する。外側に緩やかに立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。平坦面がやや広い。[堆積土] 1層に分層した。[出土遺物] なし。

SP - 02 (第6図)

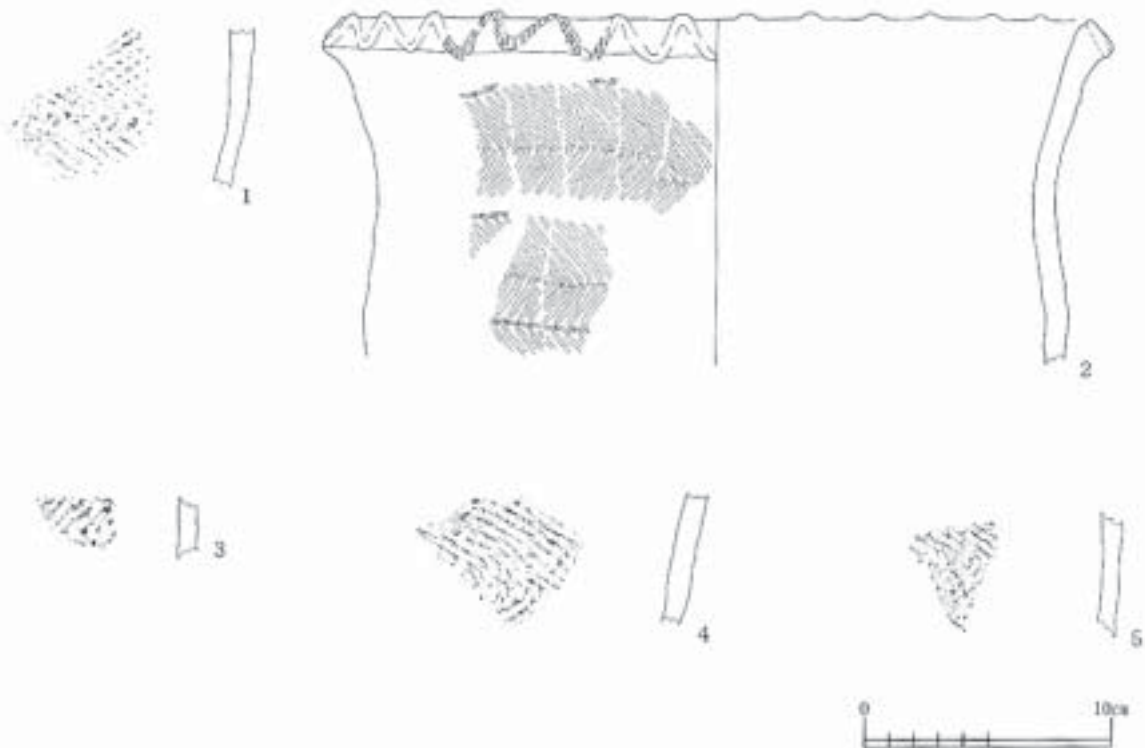
[位置] グリッドAB-12に位置する。[重複]なし。[平面形・規模] 円形を呈し、18 × 18 × 6cmを測る。[断面形・壁面] 鍋底状を呈する。外側に緩やかに立ち上がる。





第4図 SK - 01 ~ 04、SP - 09





第5図 SK - 04 出土遺物

[底面] 第層を底面とする。平坦面がやや広い。[堆積土] 1層に分層した。[出土遺物] なし。

SP - 03 (第6図)

[位置] グリッドAB-12に位置する。[重複] なし。[平面形・規模] 不整形円形を呈し、 $26 \times 23 \times 4\text{cm}$ を測る。[断面形・壁面] 弧状を呈する。外側に緩やかに立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。比較的平坦である。[堆積土] 1層に分層した。[出土遺物] なし。

SP - 04 (第6図)

[位置] グリッドAB-12に位置する。[重複] なし。[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、 $13 \times 12 \times 5\text{cm}$ を測る。[断面形・壁面] 鍋底状を呈する。外傾しながら立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。若干起伏がある。[堆積土] 1層に分層した。[出土遺物] なし。

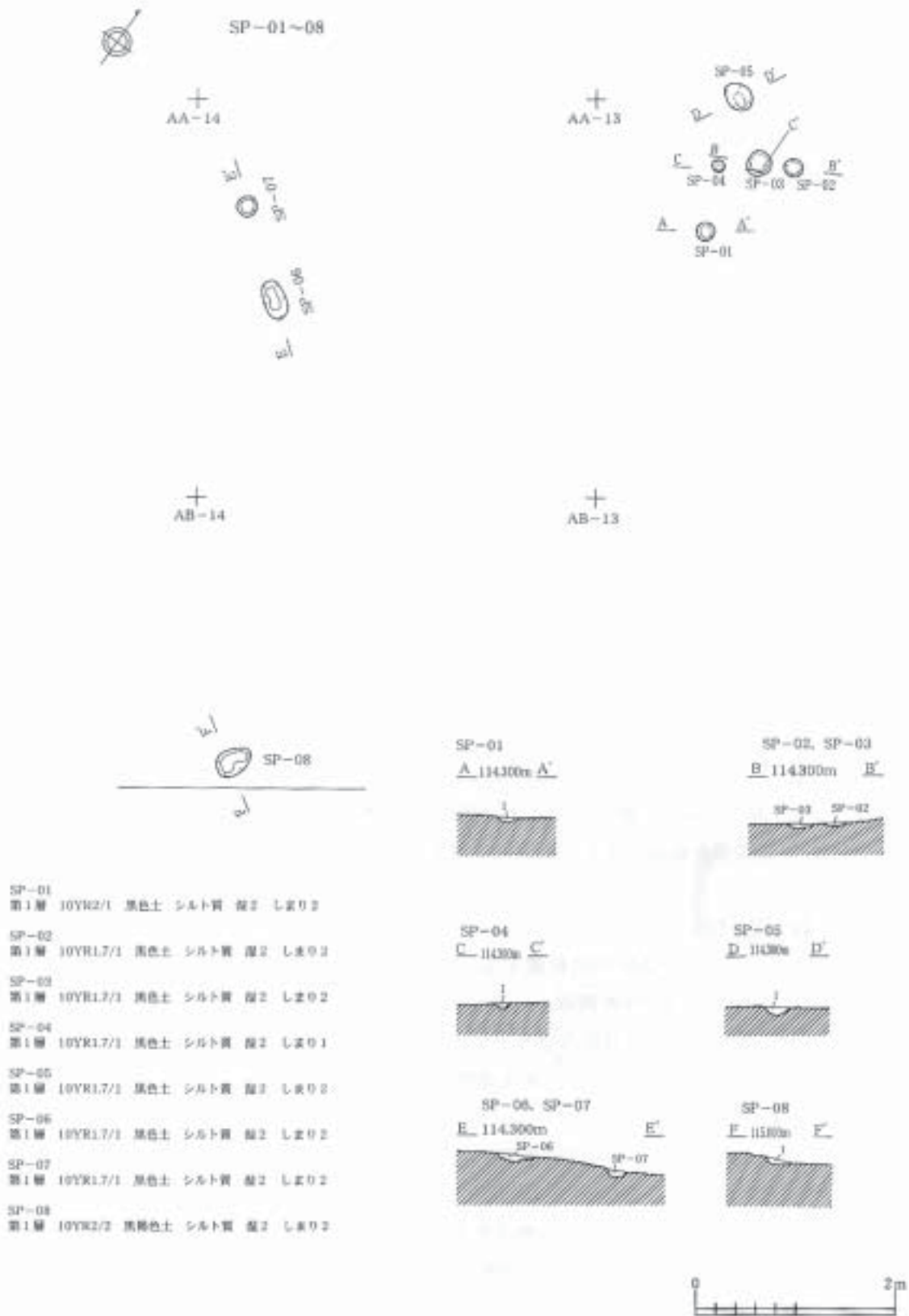
SP - 05 (第6図)

[位置] グリッドAB-12に位置する。[重複] なし。[平面形・規模] 楕円形を呈し、 $30 \times 25 \times 8\text{cm}$ を測る。[断面形・壁面] 鍋底状を呈する。北壁側が南壁側に比べてやや緩やかに立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。底面は平坦である。[堆積土] 1層に分層した。[出土遺物] なし。

SP - 06 (第6図)

[位置] グリッドAB-13に位置する。[重複] なし。[平面形・規模] 小判形を呈し、 $40 \times 24 \times 9\text{cm}$ を測る。[断面形・壁面] 不整形を呈し、緩やかに外傾しながら立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。起伏がある。[堆積土] 1層に分層した。[出土遺物] なし。

SP - 07 (第6図)



第6図 SP - 01 ~ 08

[位置] グリッドAB-13に位置する。[重複] なし。[平面形・規模] 円形を呈し、21 × 21 × 9cmを測る。[断面形・壁面] 鍋底状を呈する。外傾しながら立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。底面は平坦である。[堆積土] 1層に分層した。[出土遺物] なし。

SP - 08 (第6図)

[位置] グリッドAC-13に位置する。[重複] なし。[平面形・規模] 不整楕円形を呈し、38 × 27 × 7cmを測る。[断面形・壁面] 鍋底状を呈する。緩やかに外傾しながら立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。やや起伏がある。[堆積土] 1層に分層した。[出土遺物] なし。

SP - 09 (第4図)

[位置] グリッドAC-13に位置する。[重複] なし。[平面形・規模] 不整円形を呈し、40 × 38 × 13cmを測る。[断面形・壁面] 鍋底状を呈する。外傾しながら立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。底面は平坦である。[堆積土] 1層に分層した。[出土遺物] なし。

SP - 10 (第7図)

[位置] グリッドAB-14に位置する。[重複] なし。[平面形・規模] 不整楕円形を呈し、70 × 56 × 80cmを測る。[断面形・壁面] 鍵形を呈する。南壁側から北壁側に向かって鋭角に立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。底面は、V字状で平坦部はみられない。[堆積土] 4層に分層した。[出土遺物] なし。

SP - 11 (第7図)

[位置] グリッドAA-15に位置する。[重複] なし。[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、26 × 25 × 10cmを測る。[断面形・壁面] 鍋底状を呈する。外傾しながら立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。底面は平坦である。[堆積土] 2層に分層した。[出土遺物] なし。

SP - 12 (第7図)

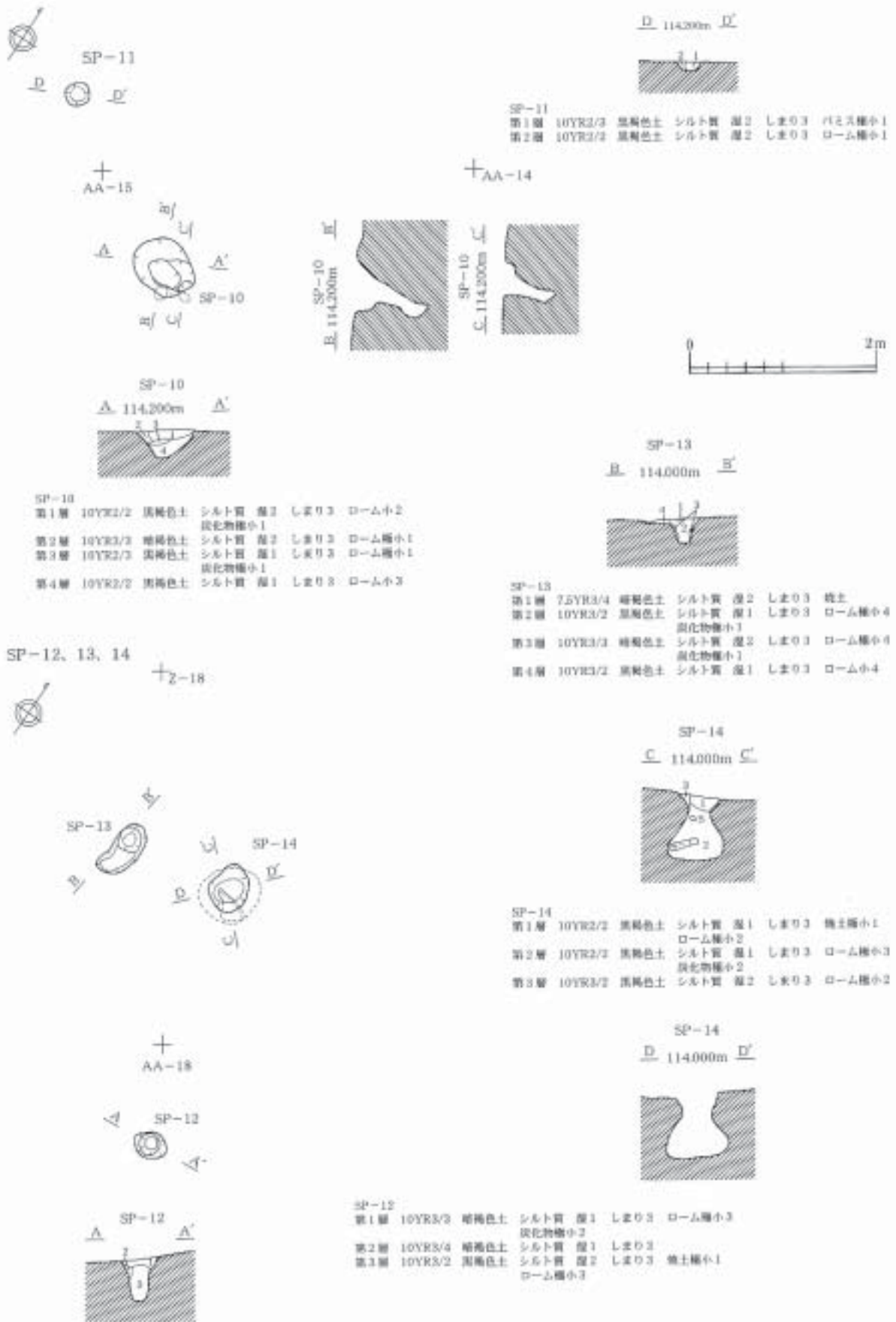
[位置] グリッドAB-18に位置する。[重複] なし。[平面形・規模] 不整隅丸方形を呈し、36 × 30 × 47cmを測る。[断面形・壁面] 柱穴状を呈する。やや急激に立ち上がり、東壁上部で若干開きながら立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。底面は平坦である。[堆積土] 3層に分層した。[出土遺物] なし。

SP - 13 (第7図)

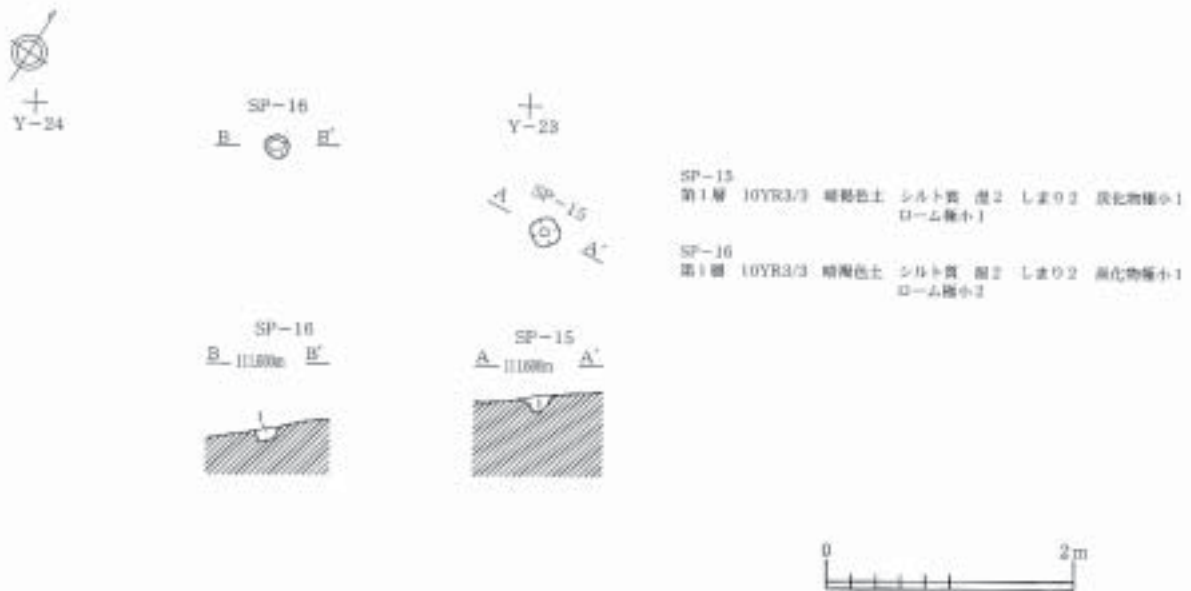
[位置] グリッドAA-18に位置する。[重複] なし。[平面形・規模] 柱穴部は円形で不整長楕円形の掘り方を持つ。[断面形・壁面] 柱穴状を呈する。やや急激に立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。底面は平坦である。[堆積土] 4層に分層した。第4層は第1・2層に切られており、掘り方と判断した。[出土遺物] なし。

SP - 14 (第7図)

[位置] グリッドAA-17に位置する。[重複] なし。[平面形・規模] 開口部は不整長楕円形を呈し、53 × 42 × 70cmを測る。[断面形・壁面] 袋状を呈する。内傾して立ち上がり括れ部でやや直立し開口部に向かって外傾しながら立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。



第7図 SP - 10 ~ 14



第8図 SP - 15、16

底面は平坦である。[堆積土] 3層に分層した。[出土遺物] 第2層中から自然礫ならびに台石1点が出土している。

SP - 15 (第8図)

[位置] グリッドZ-22に位置する。[重複] なし。[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、 $23 \times 23 \times 15\text{cm}$ を測る。[断面形・壁面] 掘鉢状を呈する。外傾しながら立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。底面は平坦である。[堆積土] 1層に分層した。[出土遺物] なし。

SP - 16 (第8図)

[位置] グリッドZ-23に位置する。[重複] なし。[平面形・規模] 不整円形を呈し $20 \times 18 \times 12\text{cm}$ を測る。[断面形・壁面] 鍋底状を呈する。外傾しながら立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。底面は、若干起伏がある。[堆積土] 1層に分層した。[出土遺物] なし。

### 3. 溝状遺構

SD - 01 (第9図)

[位置] グリッドAC-17からU-32にかけて位置する。調査区外へ延び、東側は平成7年度調査のB区第1号溝状遺構の延長部につながるものと思われる。[重複] なし。[平面形・規模] 直線状である。調査区内では $6700 \times 140 \times 50\text{cm}$ を測る。[断面形・壁面] 鍋底状を呈する。外傾しながら立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。底面は、若干起伏がある。[堆積土] 5層に分層した。平成7年度調査区との層序の対比において共通層は第1層のみで第2層以下の層については差異を生じている。距離的に離れており成層過程の差に起因するものと思われる。[出土遺物] 堆積土中から縄文時代晩期の土器等が出土している(第9図)。また、一部の地点からビニール等現代の産物が見つかる。





SN-01

U-32+2mN



SN-01

- 第1層 10YR2/3 暗褐色土 シルト質 凝1 しまり2 炭土小4
- 第2層 10YR3/3 暗褐色土 シルト質 凝1 しまり3 炭土種小2
- 第3層 10YR3/4 暗褐色土 シルト質 凝1 しまり3 炭土種小1

SX-01

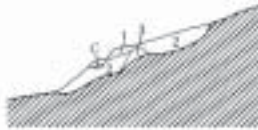
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 シルト質 凝1 しまり3 炭化物小4、P2ス種小1  
ローム種小1
- 第2層 10YR3/4 暗褐色土 シルト質 凝1 しまり3 炭化物種小2
- 第3層 10YR4/6 褐色土 ローム質 凝1 しまり3 炭化物小1、P2ス種小2
- 第4層 10YR4/6 褐色土 ローム質 凝1 しまり3 炭化物種小2、P2ス種小1



Y-26

SN-01

△ 103.400m



SX-01



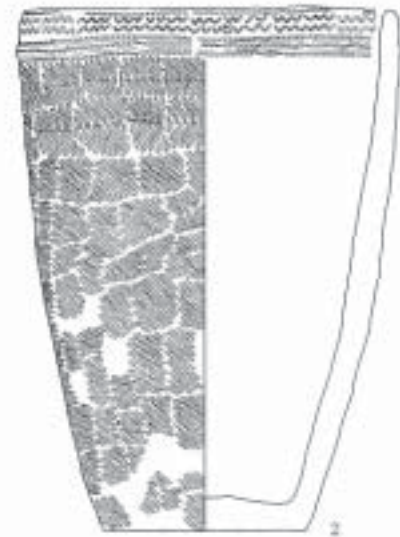
Z-26+2mN



U-32

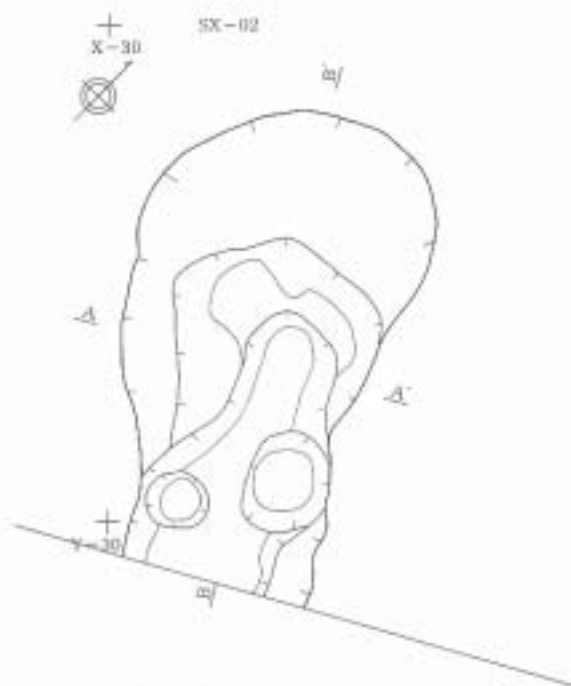
SX-01

△ 109.500m

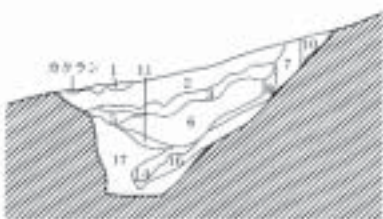


第10図 SN - 01、SX - 01

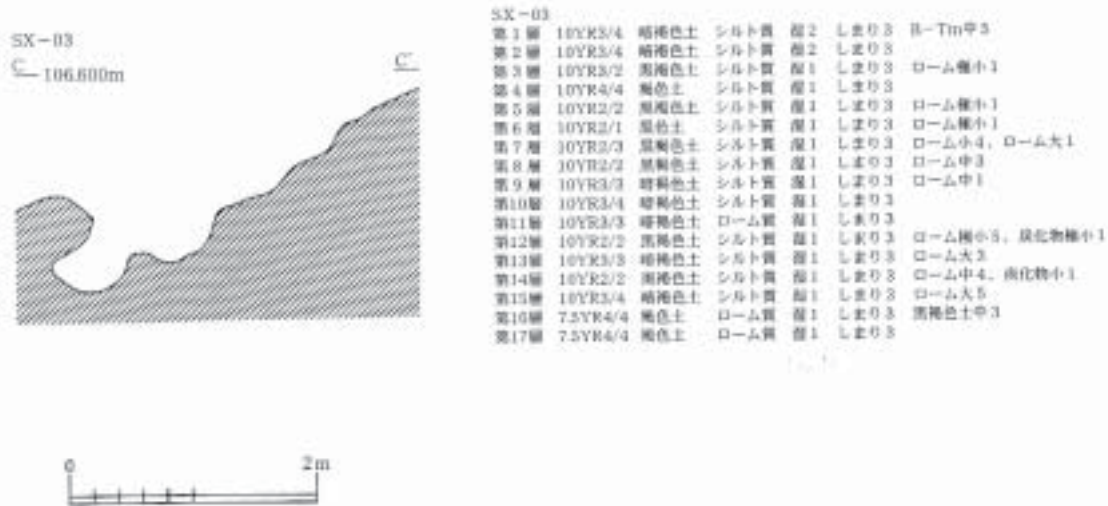




- SX-02
- |     |         |      |      |    |      |               |
|-----|---------|------|------|----|------|---------------|
| 第1層 | 10YR2/1 | 褐色土  | シルト質 | 層1 | しまり3 |               |
| 第2層 | 10YR2/2 | 黄褐色土 | シルト質 | 層1 | しまり3 | 炭化物小2、ローム中4   |
| 第3層 | 10YR2/2 | 黄褐色土 | シルト質 | 層1 | しまり3 | 炭化物小5、パイス小4   |
| 第4層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | シルト質 | 層1 | しまり3 | 炭化物小4、パイス小4   |
| 第5層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | シルト質 | 層1 | しまり3 | 炭化物層小2、パイス小3  |
|     |         |      |      |    |      | ローム中2         |
| 第6層 | 10YR4/4 | 褐色土  | ローム質 | 層1 | しまり3 | 炭化物層小1、パイス層小1 |
| 第7層 | 10YR4/6 | 褐色土  | ローム質 | 層1 | しまり3 | 炭化物層小1        |



第11図 SX - 02、03



第12図 SX - 03

#### 4. 焼土遺構

SX - 01 (第10図)

[位置] グリッドV-32に位置する。[重複] なし。[平面形・規模] 不整形を呈し、96 × 40 × 20cmを測る。[堆積土] 3層に分層した。このうち第1層が焼土層である。[出土遺物] 第1層直下から焼成粘土塊が出土している(写真図版6)。

#### 5. その他の遺構

SX - 01 (第10図)

[位置] グリッドZ-26に位置する。[重複] なし。[平面形・規模] 楕円形を呈する。67 × 58 × 43cmを測る。[断面形・壁面] 袋状を呈する。北壁側はやや内傾しながら立ち上がり中位からオーバーハングする。[底面] 第層を底面とする。底面は弧状を呈している。[堆積土] 4層に分層した。付近に木根があり、第1層の成層について影響が考えられる。[出土遺物] 第1層から円筒下層d<sub>1</sub>式土器が2点出土している(第10図)。前述のとおり、直接本遺構の帰属時期について決定する要素は少ないものと思われる。また、第1層中から炭化種子(クルミ)が出土した。

SX - 02 (第11図)

[位置] グリッドY・Z-29に位置し、調査区外へ延びる。[重複] なし。[平面形・規模] 不整形を呈し、現存長で390 × 200 × 85cmを測る。不規則な掘り込みを有している。[断面形・壁面] 不整形を呈する。外傾しながら立ち上がる。[底面] 第層を底面とする。起伏が激しい。[堆積土] 7層に分層した。[出土遺物] なし。

SX - 03 (第11・12図)

[位置] グリッドX-30に位置する。[重複] なし。[平面形・規模] 不整形を呈し、340 × 250 × 105cmを測る。SX-02と同様不規則な掘り込みを有している。[断面形・壁面] 不整形を呈している。北壁側はやや緩やかに外傾しながら立ち上がる。[底面] 第層を底面としている。[堆積土] 17層に分層した。第1層中にB-Tmブロックが多量含まれている。[出土遺物] なし。

## 第2節 遺構外出土遺物

### 1. 土器（第13～16図）

ダンボール約3箱分出土した。破片資料がほとんどで、摩滅の激しい資料も多い。第13図～第14図までは、縄文時代前期末葉円筒下層d<sub>1</sub>～d<sub>2</sub>式に帰属する資料である。このうち口縁部資料は、第13図1～第14図19までで口縁部文様帯を持つもの（第13図、第14図18）と口縁部文様帯を持たないもの（第14図19）に大別される。口縁部文様帯を持つものについては、胴部地文に結束第一種、絡条体回転文、複節、単節縄文を持ち、胴部上半には結束第一種が施されるものがほとんどである。また結節回転文が施されるものもある（第13図9～11）。口縁部文様帯には撚糸圧痕、単節縄文圧痕、単軸絡条体圧痕が施される。第14図18は、文様帯の幅が極端に狭く、撚糸の圧痕が一行施されるのみの資料である。

口縁部文様帯を持たないものについては、地文の結束第一種が口縁部付近まで施されるのみの資料である。第14図19は補修孔が見られる。

第15図32～47は、縄文時代中期に帰属する資料である。第15図32は、胴部上半の資料で地文にLRの結束第一種が施され、貼付上には原体が押圧される。円筒上層a式に属すると考えられる。第15図33、34は口縁部破片で馬蹄形状の原体の押圧が施される。円筒上層b式に属すると考えられる。第15図35、36は胎土、焼成から同一個体と思われる、SK-04出土の資料とも同一個体と考えられる。胴部については地文に結束第一種が施されるのみで貼付等は施されない。口縁部には貼付がなされ、貼付上には原体が押圧される。円筒上層c式に帰属すると考えられる。第15図7は、胴部破片で明確な帰属は不明だが繊維痕等は見られない。地文に条痕文が施されたのち、複節の0段多条が施される。第15図38～41はいずれも同一個体であるものと思われる、円筒上層e式に属すると考えられる。第15図42～47は、地文にRL斜縄文が施されたのち沈線が施される。大木8b併行期に帰属すると考えられる。

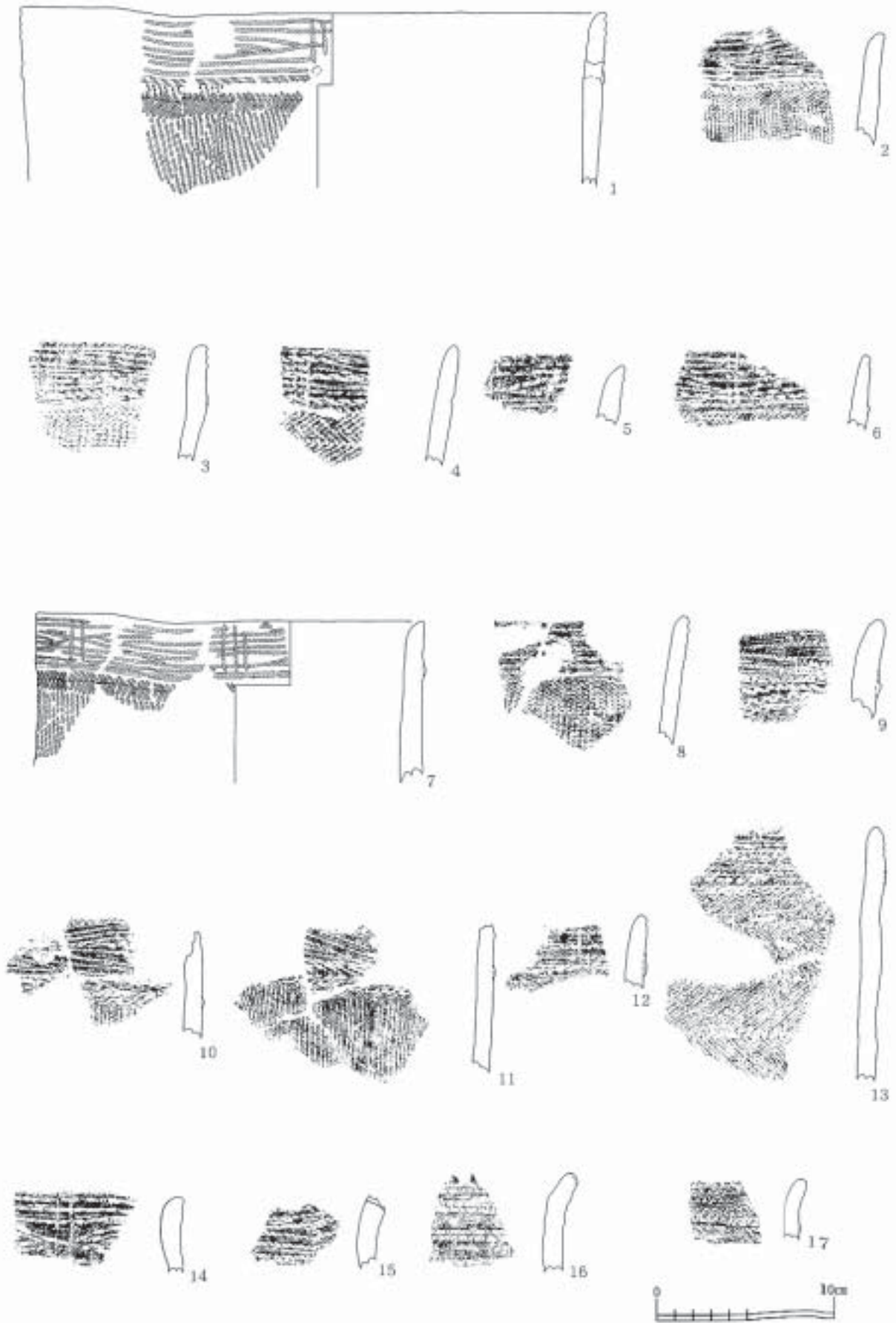
第15図48、第16図49、50は縄文時代後期に帰属する資料である。第16図49は深鉢の口縁部にあたる。十腰内 B～ 式にかけての資料と考えられる。第16図50は、無文の小型土器で十腰内 B～ 式に帰属すると考えられる。第15図48は、深鉢の胴部破片で地文にRL斜縄文が施されたのち横位の沈線が施され、その沈線に直交するように刺突文が施される。十腰内 式に帰属すると考えられる。

第16図51～68は縄文時代晩期に帰属する資料である。第16図51～58は地文のみ、あるいは無文の資料であるが胎土等が後期の土器と異なることから該期に帰属させた。明確な帰属時期については不明であるが、およそ大洞C<sub>2</sub>～A式に帰属するものと考えられる。

第16図59は、深鉢で地文にRLの縦走縄文が施され、口縁部には幅広の沈線が6条施される。中央の沈線には粘土瘤が見られる。大洞C<sub>2</sub>式～A式に帰属するものと考えられる。

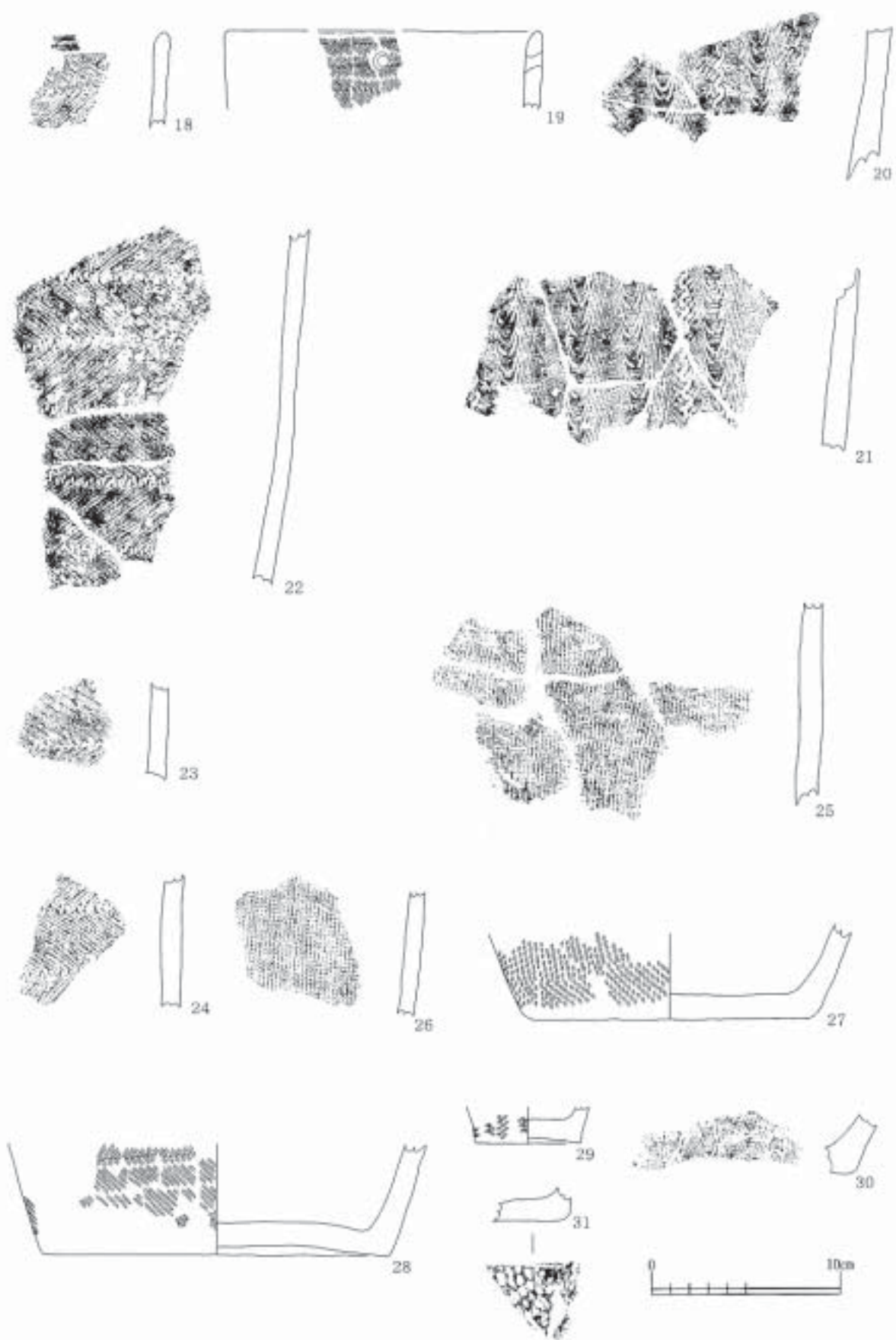
第16図60～65は胎土、焼成等からいずれも同一個体でSD-01出土の資料とも同一個体と考えられる資料である。口縁は波状を呈し、条痕文が施され、口縁部には3条の沈線が施される。また貫通孔が見られる。大洞A式に帰属するものと考えられる。

第16図66～68は胴部破片で、地文にRLの縦走縄文が施されたのち沈線が施される。大洞A式に帰属するものと考えられる。

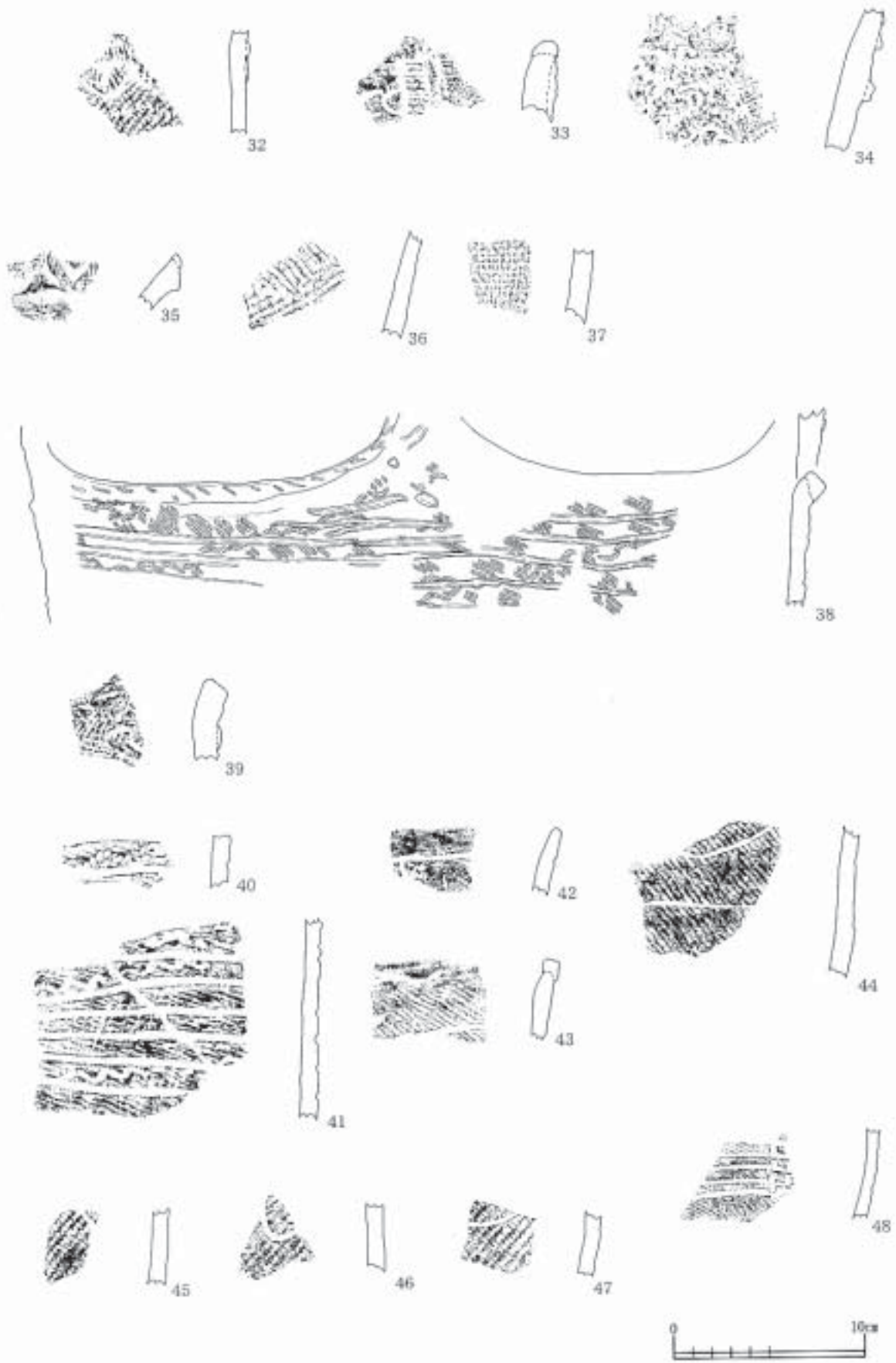


第13圖 桜峯(1)遺跡遺構外出土遺物1

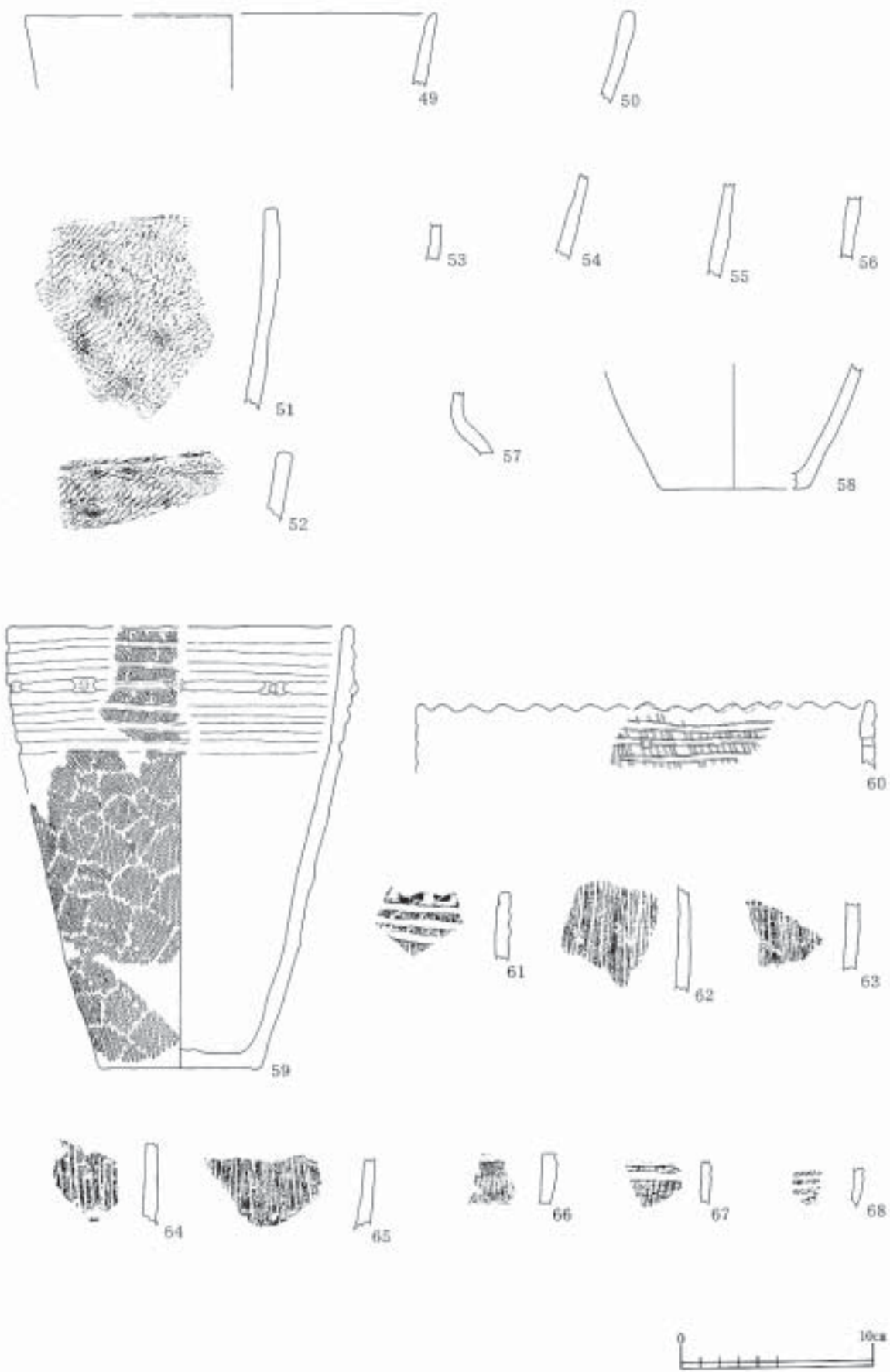




第14圖 桜峯(1)遺跡遺構外出土遺物2



第 15 圖 桜峯(1)遺跡遺構外出土遺物 3

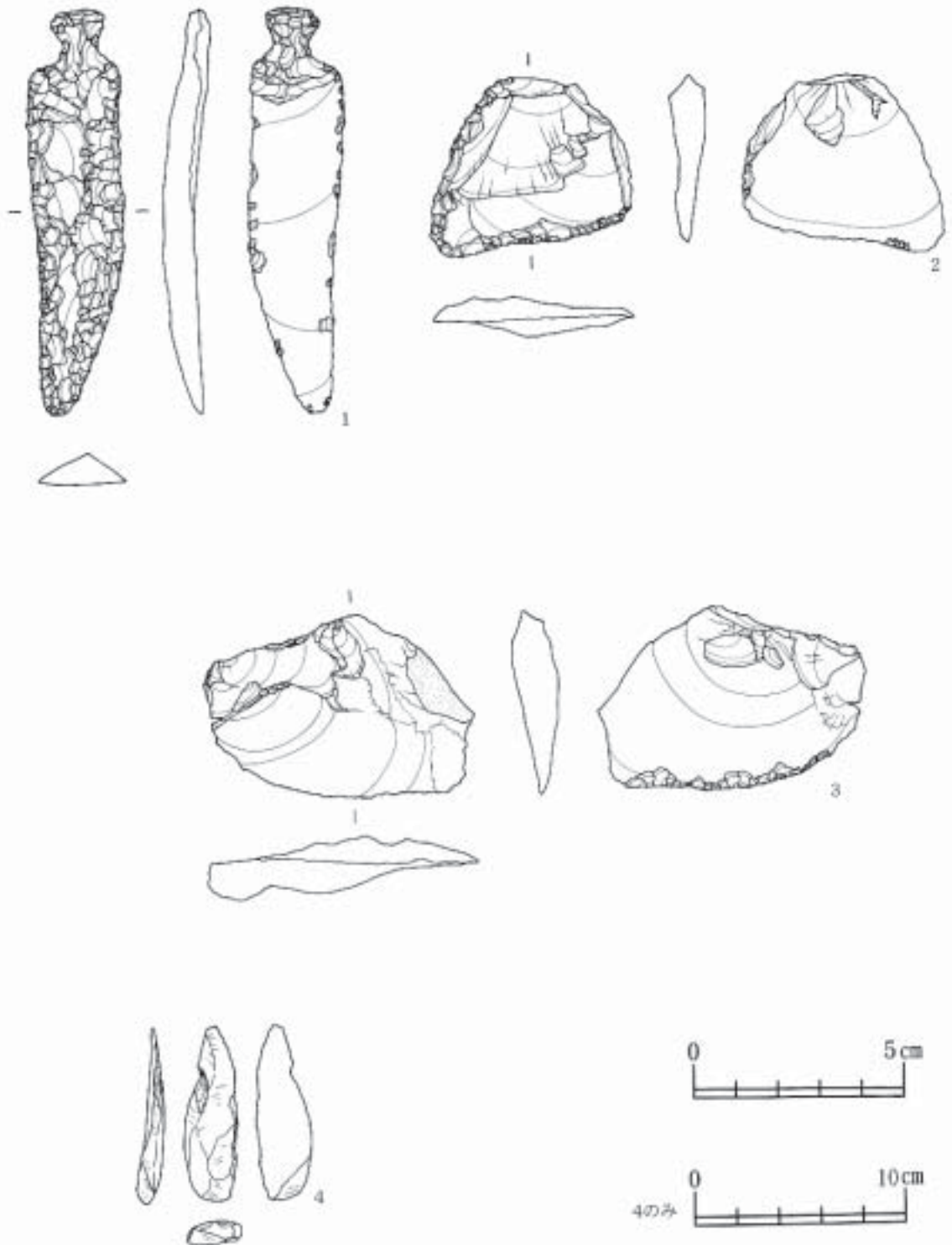


第 16 図 桜峯(1)遺跡遺構外出土土器 4



2. 石器 (第17図)

石匙1点、不定形剥片石器2点、磨製石斧1点が出土した。石材について剥片石器はいずれも珪質頁岩、磨製石斧は輝緑凝灰岩である。第17図4の磨製石斧は欠損資料である。



第17図 桜峯(1)遺跡遺構外出土遺物5

## 第 章 雲谷山吹(3) 遺跡

本遺跡では、3,061m<sup>2</sup>を発掘調査した。調査の結果、遺構の検出は見られず遺物は遺構外からダンボール1箱分が出土したのみにとどまった。

### 第1節 遺構外出土遺物

#### 1. 土器(第18図)

ダンボール約0.8箱の出土があった。ほとんどが破片資料で桜峯(1)遺跡と同様摩滅が激しい資料がほとんどであった。さらに資料数が少ないことから明確な帰属時期の求められない資料が多い。

第18図1～8は、縄文時代前期末に帰属する資料である。第18図1は、口縁部から胴部上半にかけての資料である。胴部地文にはRLR縄文が施され、胴部上半にはLR・RLの結束第一種が施される。口縁部は燃系Lの圧痕が施される。円筒下層d<sub>1</sub>式に帰属すると考えられる。第18図2は口縁部破片でLR圧痕が施される。第18図3、4は、口縁部下半～胴部上半の資料である。3は、摩滅が激しいが、地文にRL縄文が施されている。4は、地文にRL縄文が施され、胴部上半部には結節回転文が施される。口縁部にはL圧痕が施される。第18図5、6は、口縁部文様帯が無い資料で地文にLR、RLの結束第一種が施される。第18図7、8は胴部破片の資料でいずれも繊維混入痕が見られる。7は、地文にRL縄文、8は、LR縄文が施される。

第18図9、10は、縄文時代中期に帰属する資料である。第18図9は口唇部の資料で貼付上に原体の押圧が施される。第18図10は口縁部下半にかけての資料で9と同様貼付上に原体の押圧が施される。

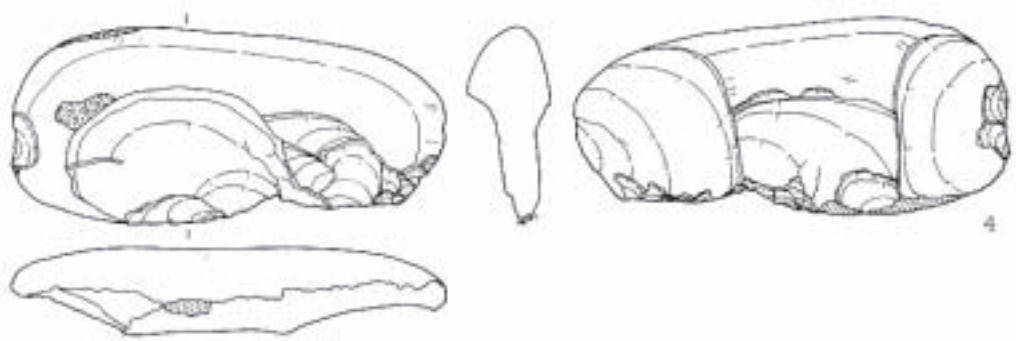
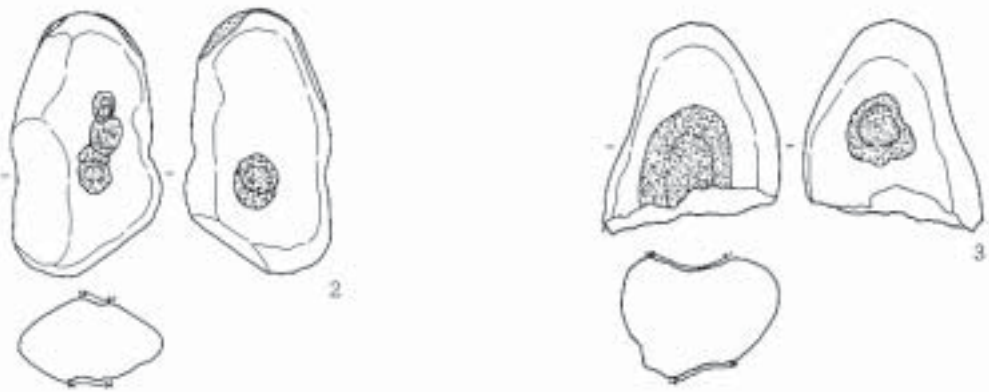
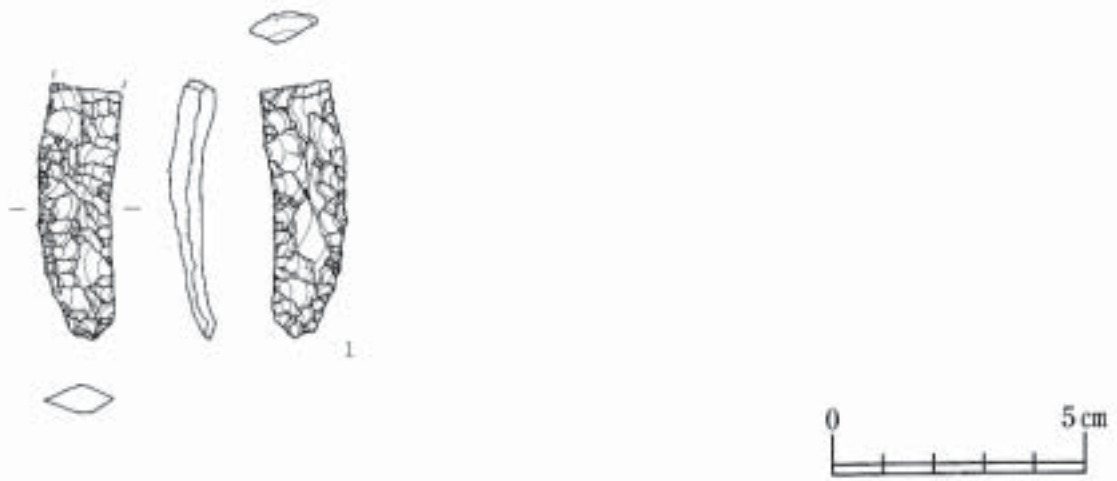
第18図11、12は、縄文時代後期に帰属する資料である。第18図11は、地文にLR縄文が施されたのち沈線が施される。胴部下半については無文である。第18図12は、胴部下半から底部にかけての資料で地文にR燃系が施されたのち沈線が施される。2点とも十腰内 B～式に帰属するものと考えられる。

#### 2. 石器(第19図)

石匙1点、敲磨器類2点、半円状扁平打製石器1点が出土した。第19図1は、石匙である。つまみ部が欠損している。石質は珪質頁岩である。第19図2、3は、敲磨器類の凹石である。2は、片面に凹痕が4つ、もう一面に1つ有する。また短軸側面の部分には磨痕が見られる。石質は安山岩である。3は、欠損資料で片面はもう一面に比べ凹部の面積が広い。石質は安山岩である。第19図4は、半円状扁平打製石器である。薄い楕円形の素材を打撃により大きく剥落させさらに細かい剥離により磨り面を細く作出させている。石質は安山岩である。



第 18 図 雲谷山吹(3)遺跡遺構外出土遺物 1



第 19 図 雲谷山吹(3)遺跡遺構外出土遺物 2

# 遺物観察表

図版番号	出土位置	層位	外面文様			底面	備考	整理番号
			口縁部	胸部上半	胸部下半			
第4図 - 1	S K-03	1層	R、沈線					h-35
第5図 - 1	S K-04	2層 + 5層						h-76
第5図 - 2	S K-04	2層 + 5層	貼付、圧痕	結束第一種	結束第一種			h-11
第5図 - 3	S K-04	6層			結束第一種			h-56
第5図 - 4	S K-04	6層			結束第一種			h-71
第5図 - 5	S K-04	6層			結束第一種			h-69
第9図 - 1	S D-01	2層			捺痕文			h-64
第9図 - 2	S D-01	2層			捺痕文			h-80
第9図 - 3	S D-01	3層			捺痕文			h-83
第9図 - 4	S D-01	3層			捺痕文			h-78
第9図 - 5	S D-01	5層		R L、沈線				h-82
第9図 - 6	S D-01	5層		R L、沈線				h-48
第10図 - 1	S X-01	1層	L 圧痕	結束第一種	単軸絡糸体1類			h-1
第10図 - 2	S X-01	1層	絡糸体縞歯状圧痕	結束第一種	R L			h-2
第13図 - 1	A B-11, A C-12	層	R 圧痕、微隆帯	結束第一種	R L R			h-9
第13図 - 2	A A-25	層	R 圧痕	結束第一種	R L			h-23
第13図 - 3	A C-9	層	R 圧痕、L R 圧痕	結束第一種	R L			h-32
第13図 - 4	A A-9	層	R 圧痕、L R 圧痕	結束第一種				h-26
第13図 - 5	A A-26	層	R 圧痕	結束第一種				h-28
第13図 - 6	A A-26	層	R 圧痕	結束第一種				h-39
第13図 - 7	A A-25	層	R 圧痕、微隆帯	結束第一種	R L R			h-10
第13図 - 8	A A-26	層	L R 圧痕	結束第一種	R L			h-38
第13図 - 9	A A-9	層	R 圧痕、R 圧痕、L 圧痕	結束第一種、結節回転文				h-29
第13図 - 10	A A-25	層	R 圧痕	結節回転文	単軸絡糸体1類			h-36
第13図 - 11	A A-26、10 T	層	R 圧痕	結節回転文	単軸絡糸体1類			h-37
第13図 - 12	A A-26	層	R 圧痕	マメツ				h-47
第13図 - 13	A B-9	包含層	R 圧痕、棒状刺突	結束第一種	結束第一種			h-51
第13図 - 14	A C-10	層	R 圧痕					h-27
第13図 - 15	A C-11	層	L R 圧痕					h-42
第13図 - 16	Y-20	包含層	絡糸体圧痕					h-31
第13図 - 17	11 T	層	絡糸体縞歯状圧痕				外面スス付着	h-24
第14図 - 18	A A-10	層		結束第一種			海綿骨針微量含	h-30
第14図 - 19	A B-9	包含層	結束第一種	結束第一種			補修孔あり	h-13
第14図 - 20	1 T	包含層			単軸絡糸体1 A 類			h-54
第14図 - 21	A C-11、12、1 T	層、包含層			単軸絡糸体1 A 類			h-53
第14図 - 22	A B-9	層			結束第一種			h-52
第14図 - 23	A A-9	層			結束第一種			h-79
第14図 - 24	A B-9	層			結束第一種			h-72
第14図 - 25	A A-25、10 T	層			単軸絡糸体1類			h-55
第14図 - 26	A A-26	層			単軸絡糸体1類			h-65
第14図 - 27	A A・A C-12、A B-13、1 T	層、包含層			R L R			h-5
第14図 - 28	A B-9	層、包含層			結束第一種			h-4
第14図 - 29	A B-15	表採			結束第一種縦			h-6
第14図 - 30	A A-12、A B-13	層、包含層			単軸絡糸体1 A 類			h-84
第14図 - 31	A A-12	層					圧痕	h-85
第15図 - 32	A C-16	層		貼付、L 圧痕、結束第一種				h-58
第15図 - 33	A B-14	層	馬蹄形圧痕、L 圧痕、R 圧痕					h-43
第15図 - 34	A A-14	層	馬蹄形圧痕、L 圧痕、R 圧痕					h-44
第15図 - 35	Y-21	包含層	貼付、R 圧痕					h-34
第15図 - 36	Y-21	包含層			結束第一種			h-70
第15図 - 37	A B-14	層			捺痕?のち R L			h-68
第15図 - 38	1 T、A C-11	層	R 圧痕、L R 横走、沈線、貼付	L R 横走、沈線				h-15
第15図 - 39	A B-11	層	R 圧痕、L R、沈線、貼付					h-20
第15図 - 40	A C-11	風倒木		L R 横走				h-18
第15図 - 41	A C-11・12	層、包含層		L R 横走、結節回転文、沈線				h-19
第15図 - 42	A A-12	層	R L、沈線					h-25
第15図 - 43	1 T	包含層	R L、沈線					h-22
第15図 - 44	1 T	包含層			R L、沈線			h-75
第15図 - 45	Z-12	層			L R、沈線			h-73
第15図 - 46	A A-14	層			L R、沈線			h-74
第15図 - 47	A A-26	層			L R、沈線			h-67
第15図 - 48	A A-21	包含層			R L、沈線、刺突痕			h-66
第16図 - 49	A B-13	層	無文					h-14
第16図 - 50	Y-24	包含層	無文					h-91
第16図 - 51	A A-15	層	L					h-40
第16図 - 52	A A-13	層	L					h-41
第16図 - 53	Y-24	包含層			無文			h-89
第16図 - 54	Z-25	層			無文			h-88
第16図 - 55	Z-25	層			無文			h-86
第16図 - 56	Z-25	層			無文			h-90
第16図 - 57	Z-26	層			無文			h-87
第16図 - 58	Z-25	層			無文			h-8
第16図 - 59	Z・A A-12	層、表採、風倒木	R L、沈線、粘土瘤	R L、沈線	R L			h-3
第16図 - 60	Z-25	層	波状口縁、捺痕文、沈線				補修孔あり	h-12
第16図 - 61	11 T	包含層	波状口縁、捺痕文、沈線					h-21
第16図 - 62	Y-22	包含層			捺痕文		内外面スス付着	h-59
第16図 - 63	Y-23	包含層			捺痕文			h-63
第16図 - 64	Z-26	包含層			捺痕文			h-60
第16図 - 65	Y-23	包含層			捺痕文			h-61
第16図 - 66	Y-23	包含層			R L、沈線			h-49
第16図 - 67	Z-26	層			R L、沈線			h-45
第16図 - 68	Z-25	層			沈線			h-50
第18図 - 1	I-53	包含層	L R 圧痕	結束第一種	R L R			h-17
第18図 - 2	M-45	包含層	L R 圧痕					h-104
第18図 - 3	M-45	包含層		R L ?				h-101
第18図 - 4	M-45	包含層	L 圧痕	結節回転文、R L				h-99
第18図 - 5	M-45	包含層	結束第一種					h-98
第18図 - 6	L T	包含層	結束第一種					h-95
第18図 - 7	H-54	包含層			R L			h-100
第18図 - 8	A T	包含層			L R			h-103
第18図 - 9	M-45	包含層	貼付、L R 圧痕					h-96
第18図 - 10	U-35	包含層		隆帯、L R 圧痕				h-97
第18図 - 11	M-45	包含層		L R、沈線				h-102
第18図 - 12	M-51	包含層		R、沈線	R、沈線			h-16

図版番号	出土位置	層位	最大計測値(mm, g)				石質	種別	整理番号
			長さ	幅	厚さ	重さ			
第17図 - 1	X-3 0	包含層	95	22	7	17.6	珪質頁岩	石匙	M-1
第17図 - 2	A C-1 2		38	4.8	8	14.7	珪質頁岩	不定形石器	M-2
第17図 - 3	A A-2 6		4.3	6.2	12	25.7	珪質頁岩	不定形石器	M-3
第17図 - 4	A A-2 6		(8.2)	(2.5)	9	26.2	輝緑凝灰岩	磨製石斧	M-4
第19図 - 1	2 1 T	包含層	(50)	16	7	5.7	珪質頁岩	石匙	M-5
第19図 - 2	R-4 4	包含層	102	56	33	218	安山岩	敲磨器類	M-6
第19図 - 3	P-5 2	包含層	(84)	67	48	252	安山岩	敲磨器類	M-7
第19図 - 4	M-4 5	包含層	77	173	33	416	安山岩	半円状扁平打製石器	M-8



## 第 章 ま と め

県営八甲田地区農免農道に係る桜峯(1)遺跡・雲谷山吹(3)遺跡の調査(以下本調査)は、両遺跡あわせて4,761m<sup>2</sup>の調査となった。調査の結果、桜峯(1)遺跡は、土坑4基、ピット16基、溝状遺構1条、焼土遺構1基、その他の遺構3基を検出し、ダンボール3箱の土器・石器等が出土した。また雲谷山吹(3)遺跡は、遺構の検出が見られず、ダンボール1箱の遺物の出土があったのみにとどまった。以下、平成9年度報告済みの国道103号道路改良事業に係る「桜峯(1)遺跡」(以下前調査)の成果と併せて本調査の成果についてまとめることとする。

本調査における桜峯(1)遺跡の調査区は、前調査のB区の西傾する緩やかな丘陵の延長部から雲谷山吹(3)遺跡にかけて急激に傾斜する部分に相当している。前調査のB区においては、円筒下層d<sub>2</sub>式を中心とする遺物の出土が散逸的に包含層から出土しており、また、縄文時代後期螢沢3群・沖附(2)式期、十腰内B式期、縄文時代晩期大洞A式併行の土器、続縄文、土師器・須恵器等時代のまたがった遺物の出土が見られたにもかかわらず、遺構の検出数は極めて少なく集落の縁辺部的様相としか捉えることができなかった。

本調査においても遺構は、小規模な土坑・ピット等にとどまり、明確に集落内の施設等の機能を果たす遺構として認定できる資料は得ることができなかった。また、出土遺物についても包含層出土のものが中心であり、調査区内の様相は前調査のB区における様相を裏付ける結果となった。

しかしながら、出土遺物等を検討してみると前調査では円筒下層d<sub>2</sub>～円筒上層a式中心の組成であったが、今回の調査では円筒下層d<sub>1</sub>～d<sub>2</sub>式主体であり、それ以外に円筒上層a・b・c、e式期の土器ならびに大木8b式併行期の遺物が出土した点が着目される。また、縄文時代後期十腰内B式期～式の遺物は本調査においても出土しており、さらには縄文時代晩期大洞C<sub>2</sub>式期～A式期の遺物の出土も見られた。前調査と併せて出土遺物から見た場合、桜峯(1)遺跡は断続的ではあるが長期間にわたって遺跡周辺では人々の営みがおこなわれたという可能性が強い結果となった。

桜峯(1)遺跡ならびに雲谷山吹(3)遺跡が所在する丘陵は、比較的緩やかな傾斜地が主体であり、現在もなお土地利用が容易である。集落の立地としても利用可能な土地が多く、特定の地区に集中した継続よりは分散した部分での継続が前調査ならびに本調査の調査結果を踏まえて想定できる。

近世～近代時点での雲谷地区の大規模な土地改変の要素(牧場・植林・畑地)を踏まえると現時点での遺跡範囲での認定が極めて二次的な要因(流動的な遺物の表面観察)から遺跡の認定がされている状況にあり、集落域の検出についてこのような分散した事例では絞り込みの必要性が要求される。

今後、試掘調査を併せた周知の遺跡の範囲外についても検討の余地があるものと思われる。

引用参考文献

- |          |       |                       |
|----------|-------|-----------------------|
| 青森県教育委員会 | 1998  | 『新町野遺跡・野木遺跡』          |
| 〃        | 1999  | 『野木遺跡』                |
| 青森市教育委員会 | 1965  | 『四ツ石遺跡調査概報』           |
| 〃        | 1987  | 『横内城跡発掘調査報告書』         |
| 〃        | 1995a | 『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃        | 1995b | 『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』      |
| 〃        | 1997  | 『市内遺跡詳細分布調査報告書』       |
| 〃        | 1998  | 『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』      |
| 鈴木政四郎    | 1955  | 『横内村誌』 横内公民館          |
| 村越 潔     | 1974  | 『円筒土器文化』              |



# 写 真 图 版



調査前遠景 (E )



作業風景 (E )



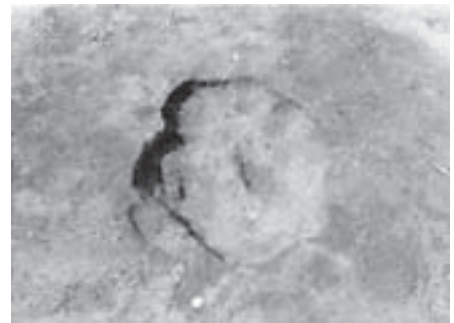
基本層序 [10T] (N )



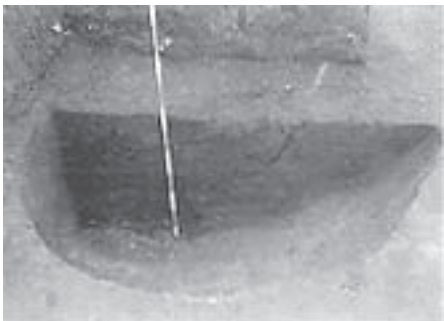
基本層序 [16T] (N )



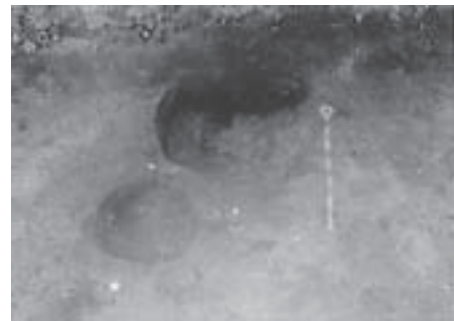
基本層序 [17T] (S )



SK - 01 完掘 (S )



SK - 02 セクション (E )



SK - 02, SP - 09 完掘 (N )

写真図版 1



SK - 03 完掘



SK - 04 セクション ( N )



SP - 01 セクション ( N )



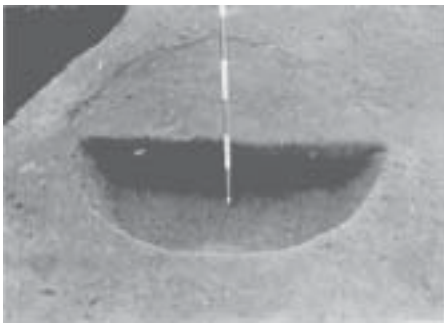
SP - 01 ~ 05 完掘 ( N )



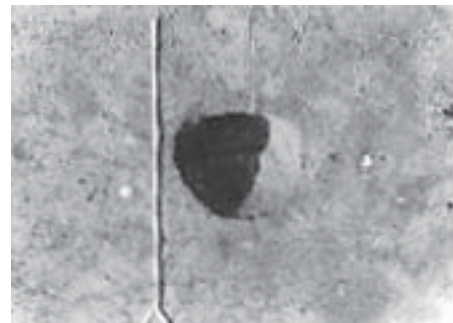
SP - 06 セクション ( W )



SP - 08 完掘 ( N )

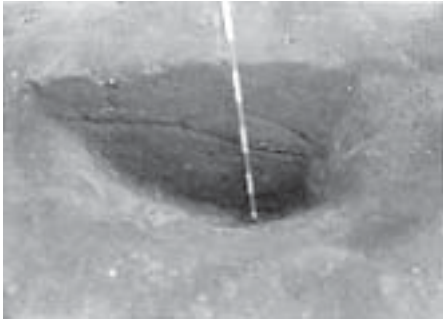


SP - 09 セクション ( E )

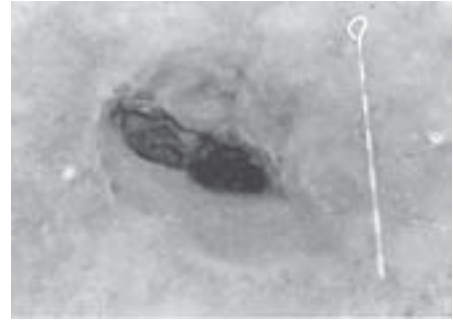


SP - 11 完掘 ( S )

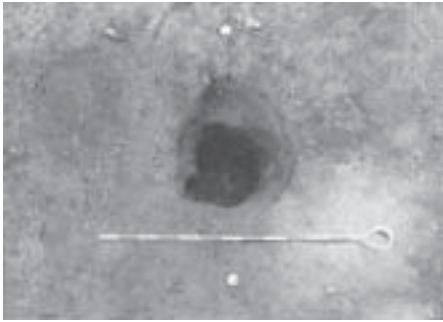
写真図版 2



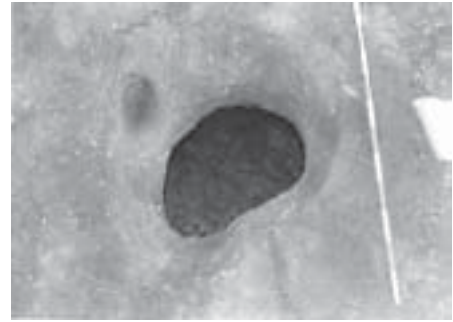
SP - 10 セクション ( N )



SP - 10 完掘 ( N )



SP - 12 完掘 ( W )



SP - 14 完掘 ( N )



SD - 01 完掘 ( E )



SD - 01 セクション ( W )



SN - 01 焼土範囲 ( W )



SX - 01 セクション ( E )

写真図版 3





SX - 01 遺物出土状況 (E )



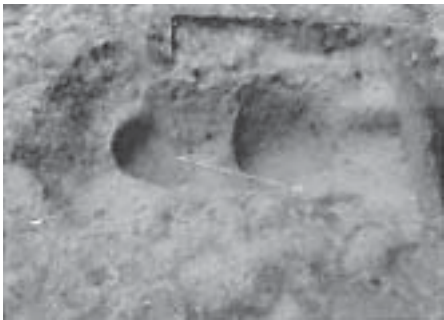
SX - 01 完掘 (S )



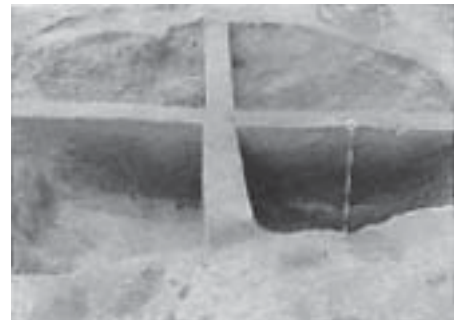
SX - 02 セクション (E )



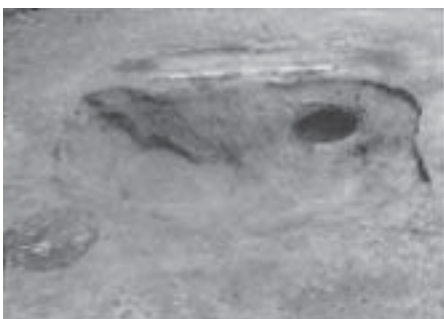
SX - 02 セクション (S )



SX - 02 完掘 (W )



SX - 03 セクション (N )



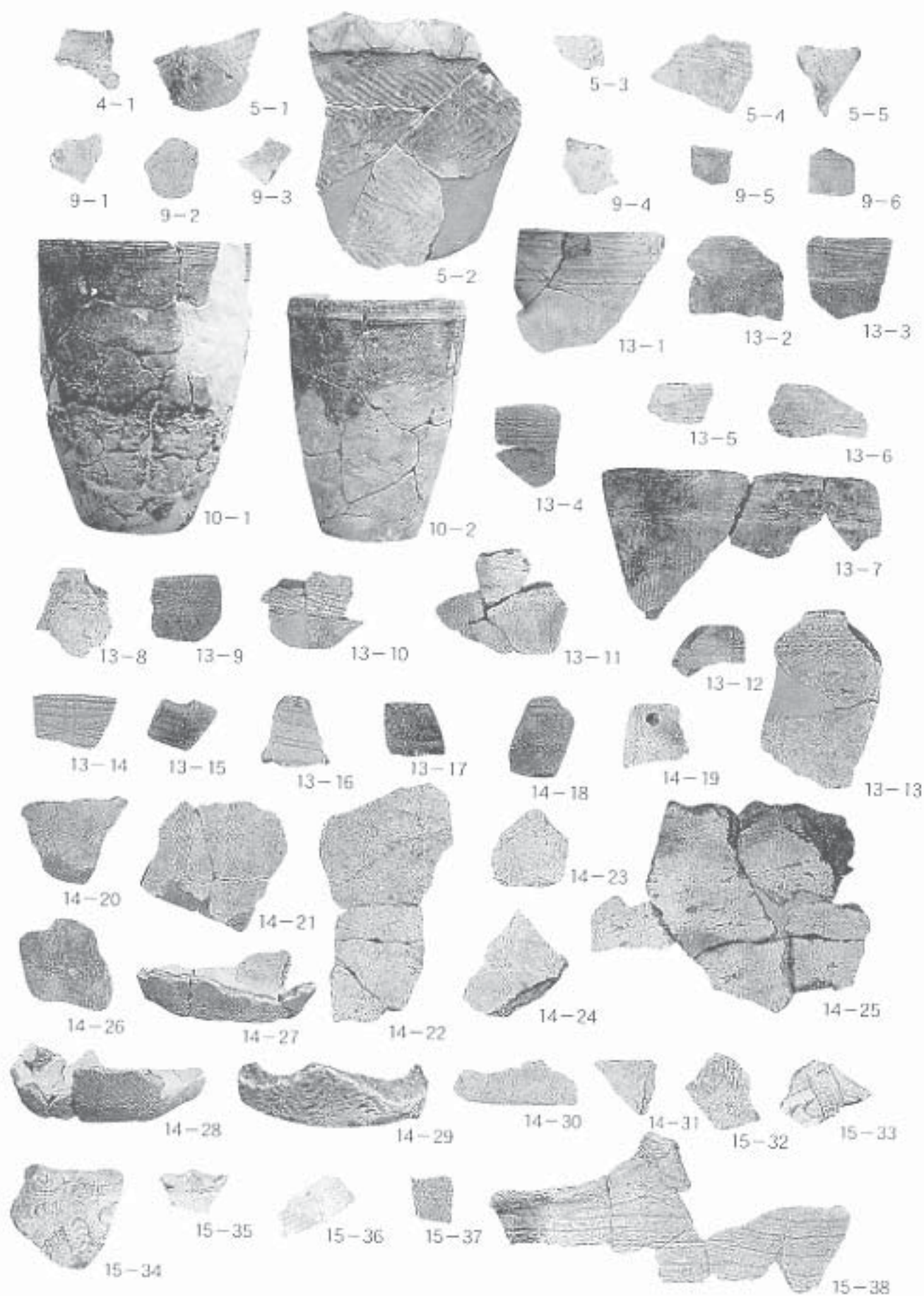
SX - 03 完掘 (E )



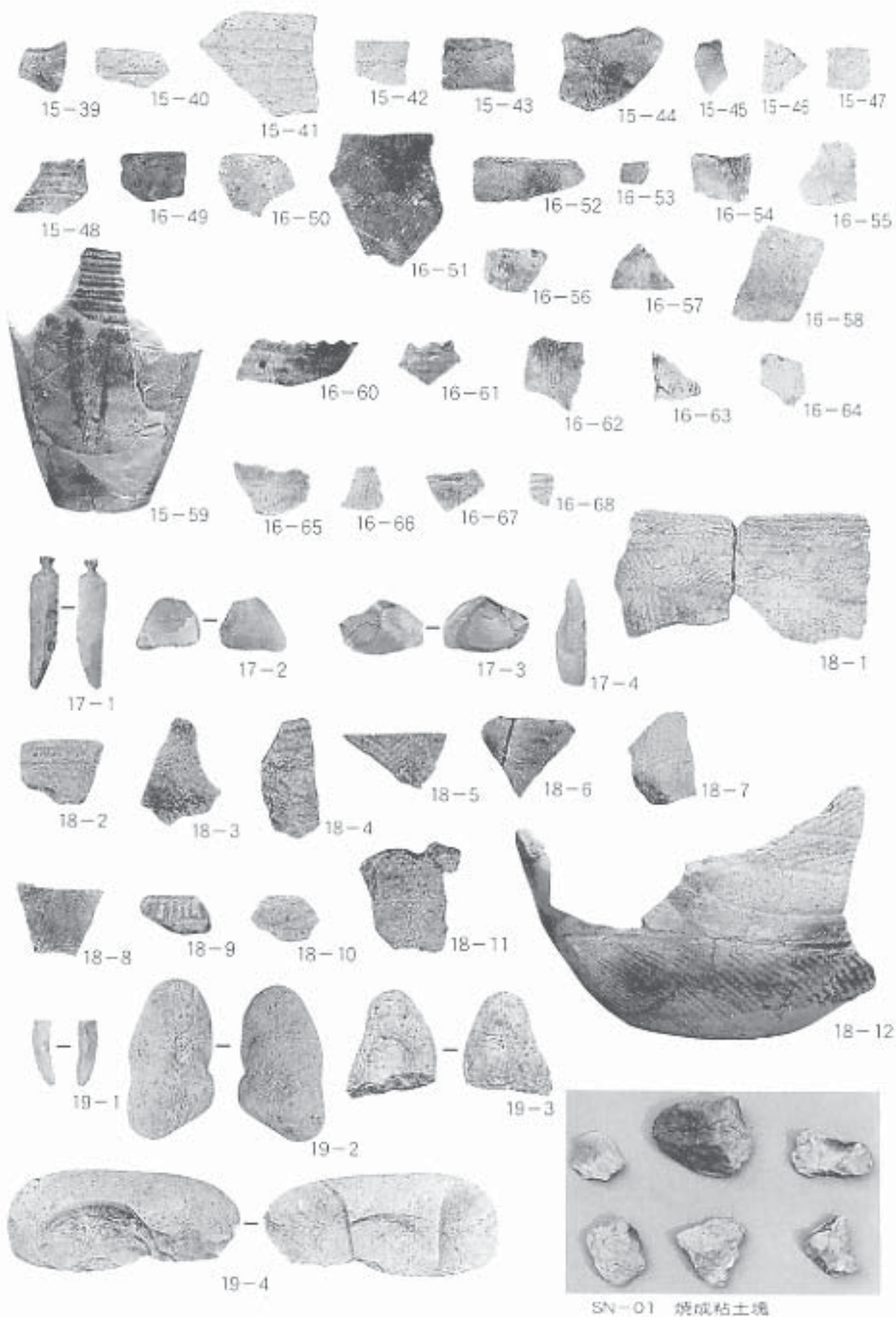
雲谷山吹(3)遺跡 調査風景 (E )

写 真 図 版 4





写真图版 5



写真图版 6

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	さくらみねかっこいち・もやまぶきかっこさんいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	桜峯(1)・雲谷山吹(3)遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第51集							
編著者名	木村淳一、堀内万里子							
編集機関	青森市教育委員会							
所在地	〒030-8555 青森県青森市中央一丁目22-5 TEL 017-734-1111							
発行年月日	西暦 2000年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さくらみね 桜峯(1)	あおもりしおおあざ 青森市大字 もやまぶき 雲谷字山吹 92-33ほか	02201	207	40° 44 58	140° 46 30	19990705 、 19990914	1,700	道路建設(県 営八甲田地区 農免農道整備 事業)に伴う 事前調査
もやまぶき 雲谷山吹(3)	あおもりしおおあざ 青森市大字 もやまぶき 雲谷字山吹 92-486ほか	02201	285	40° 44 58	140° 46 25	19990809 、 19990924	3,061	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
桜峯(1)	集落跡	縄文		土坑 ピット 溝状遺構 焼土遺構 その他の遺構		3基 19基 1条 1基 3基 縄文土器		
雲谷山吹(3)	散布地	縄文		なし		石器		



既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財1	1962	『三内霊園遺跡調査概報』	”	第29集	1996	『市内遺跡詳細分布調査報告書』	
”	2	1965	『四ツ石遺跡調査概報』	”	第30集	1996	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
”	3	1967	『玉清水遺跡調査概報』	”	第31集	1997	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
”	4	1970	『三内丸山遺跡調査概報』	”	第32集	1997	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』
”	5	1971	『野木和遺跡調査報告書』	”	第33集	1997	『新町野遺跡試掘調査報告書』
”	6	1971	『玉清水 遺跡発掘調査報告書』	”	第34集	1997	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
”	7	1971	『大浦遺跡調査報告書』	”	第35集	1997	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
”	8	1973	『孫内遺跡発掘調査報告書』	”	第36集	1998	『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』
		1979	『蚩沢遺跡』	”	第37集	1998	『新町野遺跡発掘調査報告書』
		1983	『四戸橋遺跡調査報告書』	”	第38集	1998	『野木遺跡発掘調査報告書』
青森市の埋蔵文化財	1983	『山野峠遺跡』	”	第39集	1998	『市内遺跡詳細分布調査報告書』	
”	1985	『長森遺跡発掘調査報告書』	”	第40集	1998	『小牧野遺跡発掘調査報告書』	
”	1986	『田茂木野遺跡発掘調査報告書』	”	第41集	1998	『野木遺跡発掘調査概報』	
”	1987	『横内城跡発掘調査報告書』	”	第42集	1998	『熊沢遺跡発掘調査概報』	
”	1988	『三内丸山 遺跡発掘調査報告書』	”	第43集	1999	『市内遺跡詳細分布調査報告書』	
青森市埋蔵文化財調査報告書			”	第44集	1999	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』	
”	第16集	1991	『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』	”	第45集	1999	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
”	第17集	1992	『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』	”	第46集	1999	『新町野・野木遺跡発掘調査概報』
”	第18集	1993	『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』	”	第47集	1999	『稲山遺跡発掘調査概報』
”	第19集	1993	『市内遺跡発掘調査報告書』	”	第48集	2000	『熊沢遺跡発掘調査報告書』
”	第20集	1993	『小牧野遺跡発掘調査概報』	”	第49集	2000	『稲山遺跡発掘調査既報』
”	第21集	1994	『市内遺跡詳細分布調査報告書』	”	第50集	2000	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
”	第22集	1994	『小三内遺跡発掘調査報告書』	”	第51集	2000	『桜峯(1)・雲谷山吹(3)遺跡発掘調査報告書』
”	第23集	1994	『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書』	”	第52集	2000	『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書』
”	第24集	1995	『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』	”	第53集	2000	『市内遺跡発掘調査報告書』
”	第25集	1995	『市内遺跡詳細分布調査報告書』				
”	第26集	1995	『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』				
”	第27集	1996	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』				
”	第28集	1996	『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』				

青森市埋蔵文化財調査報告書第51集  
 桜峯(1)・雲谷山吹(3)遺跡  
 発掘調査報告書

発行年月日 平成12年3月24日

発行 青森市教育委員会  
 〒030-8555 青森市中央一丁目22-5  
 TEL 017-734-1111

印刷 第一印刷株式会社  
 〒038-0003 青森市石江字江渡3-1  
 TEL 017-782-2333